

世界一かんたんなヒロインの攻略しかた^{おと}

織笠遊人



ファンタジア文庫

2960



口絵・本文イラスト さばみぞれ

|*| 織笠遊人 |ill.| さばみぞれ

Author — Yujin Orikasa Ill. — Sabamizore

オープニング

俺の瞳に映る彼女は輝いている。

（そろそろ目的地の駅に着くよ）

今まさに降り積もった雪のような真っ白い肌。

（まだ九月の初めだよ？ 雪のことを考えるには少し早いと思うけどなあ）

触れると溶けてしまうのでは？ と心配になるほど繊細で氷細工のようにみえる彼女。

（身体は部活で鍛えてるし、なにより今は心が熱く燃え上がってるよ！）

聡明な彼女が、今なにを考え、なにを願っているのか、凡人の俺には知るよしもない。

（自分の大好きなものを買いに行くんだから、今は胸をドキめかせてるはずだよ）

……ああ、うっせーなあ。俺と彼女——姫野実衣奈の時間を邪魔しないでくれよ。

（私も姫野実衣奈ですよ！ つていうか、私が本物の姫野実衣奈なのがいい！）

電車のなか。俺の視界には、隣の号車で凜と佇む姫野実衣奈が映っている。

その視界の片隅。視線の先の姫野実衣奈と、まったく同じ顔、姿形をしている人物が、

腕組みをしながら頬をぶくうと膨らませていた。

俺の瞳に映る彼女は透けている。

（その、お化けを見るような目は、なにかな？）

雪解け水のような透明感あふれる肌。

（白い肌よりも透きとおる肌のほうが、ポ、ポイント高いでしょ？）

触れると火傷してしまうのでは？ と俺の身が心配になるほど熱を帯びている彼女。

（血が通っている証拠だよ。人間味あっていいでしょ？）

アホな彼女が、今なにを考え、なにを願っているのか、凡人の俺でも手に取るように分かる。彼女が俺に本音をさらけ出してくれるからだ。

（アホとはなによ、アホとは）

俺の心の声も、彼女には漏れ伝わってしまっているのだが！

腕組み姿勢を崩し、両手を腰に当てて俺の身体にズイズイ近寄ってくる彼女。

ち、ちかいつ！ 吐息が、かかるつてば！

俺の心臓が早鐘を打ちはじめ、心拍数が上昇していくのを感じる。

（はっ、はあっ、はうっ!? な、なに、こ、これ、あわわわあ）

彼女の頬は、俺の胸の鼓動に反応するかのようになり、白でも透明でもなく秋の紅葉を思わ

せる朱へと変化していた。

（乙綺くん、き、緊張しすぎでしょ！ お、お、おおお落ち着いてっ）

お、お、おお俺に急に近づいてきたミーナが悪い。

（ま、まあ？ わ、私に緊張しちゃったのなら、し、仕方ないっ！）

ち、ちっげーし！ 姫野実衣奈の麗しい横顔に見惚れてしまったからであって、ミーナ

に緊張したわけではない！

（むむむ。あんなアホ面の、どこが麗しいのかなあ……）

入学してから、ずっとテストで一位取ってんだぜ？ アホなわけないだろ。

（むぐぐ。私も同じなのがいい！）

——そう、同じなのだ。

隣の号車で、背筋をピンと伸ばしている見目麗しい姿の姫野実衣奈と、俺の目の前でワンワン騒いでいるミーナは、まったくの同一人物なのである。認めたくはないのだが。

（あ、ここだよ！ この駅で降りるよ！ はやくう、はやく降りてえ！）

とある駅に着くと、ミーナが瞳を輝かせて俺に降車を促してきた。

片想い中の相手である姫野実衣奈を、彼女の分身と追いかける俺。

なんでこんなことに……これまでは平凡な高校生活を送っていたのに……。

俺と心拍を共有する透明な彼女——ミーナが目の前に現れたのは二日前のことである。
二日前の始業式の日、俺、早乙女乙綺とミーナの不可思議な共同生活が幕を開けたのだ。
ああー！　なんで、こんなことになっちゃったんだあ！

一章 姫野と一緒に姫野を攻略する

「表彰状、姫野実衣奈。貴女は全国高等学校総合体育大会女子バドミントン競技において、四位入賞の成績をおさめましたので、その栄誉をたたえこれを賞します」

高校一年の二学期始業式。

体育館に設置された小さな換気窓が半分開き、野良猫の穏やかな鳴き声と気だるい温風が外から注ぎ込む、処暑を過ぎた晩夏の季節。

真つ黒に日焼けしたクラスメイトたちに挟まれ、俺は壇上で表彰されている姫野実衣奈を、その他大勢のモブたちと見上げていた。

夏休み中も室内にこもり、健康的な肌色の状態を保持している俺。オセロであれば、俺の肌もリア充野郎たちと同様に、こんがり焼き上げた食パンのような色になるだろう。

「乙綺の大好きなお姫様は、夏休み中も日々研鑽しておられたようだぜ？　乙綺は何かやってたんかあ？」

後方の黒焦げ野郎、中川翔真の軽口が、静寂の体育館のなかで俺にだけ届く音量で発せ

られた。

「俺は日々何事もなく、健康に過ごせたらそれで満足なんだよ。充実してんだよ」

「相変わらず達観してんな、乙綺は。そんなんじゃ、成人する頃には枯れちまうぜ？ うえっへっへ」

翔真は茶化するように話しかけてくるが、コイツもリア充ではない。リア充に憧れリア充になりたいリア充もどき。女の子にモテるためのテクニクやファッション、女の子とのオススメのデート場所などを雑誌で見て勉強しているそうだ。

「それにしても可愛いな、姫野実衣奈」

姫野実衣奈は清楚系アイドルのようなナチュラルなミディアムヘアだ。翔真のようにワックスで無理矢理弄っている髪とは質感が違う。キューティクルケアを毎日おこなっているのだろうか、黒髪が艶やかに輝いている。花の髪飾りも彼女に似合っている。

「おいおい乙綺、声が漏れてるぜ。ほかの男子に聞かれたら目をつけられるぞ？ 気をつけろよ」

俺の通う私立光城館高校の一番人気の女子。それが俺のヒロイン、姫野実衣奈である。中等部からの内部進学組の俺とは違い、姫野実衣奈は高等部から入学してきた外部生だ。見た目の可愛さや運動神経、さらには入学時からずっと一位をキープしている学業成績

など、あらゆる分野で目立ち、一学期の時点で学校のアイドル的存在となっている。

ゆえに、彼女を狙う男子生徒は多い。

「別に問題ないさ。どうせ俺なんか相手にされるわけないんだし」

視線の先の壇上では、姫野実衣奈が賞状を恭しく受け取っている。

壇上で表彰される学校のアイドルと、それを下から見上げる冴えないモブ野郎。

姫野実衣奈と俺とは、展開される物語が違うのだ。

そんなことを考えながら、俺は尊敬と称賛の眼差しで彼女の晴れ舞台を見送った。

始業式が終わり、平凡な日常の入り口である教室へと向かう。と、そのとき――

「きゃあああああ！」

重い足どりで階段をのぼっていると、突然、空から女の子が降ってきた。

「うおっ！」

階段の上から転落してきた女の子を咄嗟にかばい、俺は彼女の下敷きになる。俺が下にいなかったら、彼女は踊り場に頭から突っ込んでいただろう。危なかった……。

仰向けになって寝転ぶ俺の腹部に、女の子のささやかな重みを感じる。

クソみたいな俺の日常で初めてのラブコメ展開だ。

女の子の姿を確認しようとしたのだが、俺の顔は紙のようなものに覆われ、視界が妨げられてしまっていた。

紙を手にとって確認してみる。

この紙は……………表彰状？ 女の子のものだろうか、名前は……………つと。

「あわわわあゝ！」

あわわわあゝ！

女の子の声と俺の心の叫び声が重なる。

——表彰状に記載されていた名前は姫野実衣奈。ということは、今、俺のお腹の上に乗っているのも……………ごくり。どくんっどくんっドクドクドクドクドクツ。

生唾を飲み込む音が開幕音となり、俺の心臓は超高速で連打されるドラム状態となった。俺から慌てて離れた女の子に、恐る恐る顔を向けてみる。

……………紛うことなき姫野実衣奈だった。毎日、妄想のなかに登場している同級生であり、俺の憧れのヒロインである彼女。

「ああああ、しょのっ、その！ だだだ大丈夫でふゆか!?」

大丈夫じゃないのは俺のほうだった。

「私より貴方のことが心配です！ ごめんなさい、本当に私のせいで……………こんな」

「おおお俺は大丈夫つでしゅっ。ぜぜぜっつんぜっつん平気っすうう！」

フラフラになりながら立てアピールする。

今は身体の痛さよりも、目の前にいる美少女への緊張感のほうが問題だ。

俺は姫野実衣奈と一度も話をしたことがない。俺は彼女のこともろん知っているが、彼女は俺のことなどまったく知らないだろう。貴族と平民には接点がないのだ。

「本当に助かりました。自分のことを顧みず、見ず知らずの私のことを守ってくださいっ

……………感謝の言葉が見つからないほど感激しています。身体のことがか心配ですので、保健室まで一緒に行きましょう」

「あ、い、いえ！ おおお俺は、だ、大丈夫なんで！ お気遣いなさらずっ！」

「やはりどこか痛めたのでしょうか？ 少しの間、ここで待っていてください。保健の先生を呼んできますので」

「本当に大丈夫ですー！」

——その場から逃げるように、急いで階段を駆け上がる。

「はあはあ……………マジか……………姫野実衣奈と会話しちまったぜ……………信じらんねえ！」

夢にまでみた憧れの彼女との会話。

妄想の中では毎日のように彼女と会話しているが、現実では初めてのことだった。

「ああ、それにしても、なんか柔らかかったなあ、女子の制服の生地って男子と違（ちが）うのかな。良い匂いもしたし、むにゅっとした感触たまらなかったなあ……」

俺は、しばしの間、奇跡の余韻を噛み締める。

（ねえねえ！ 本当に大丈夫なの!? 念のため、病院で診てもらったほうがいいよ?）

ん!? なんだ!? 人の声が聞こえた気がするぞ。大事な余韻を邪魔するのは、誰だ! 周りを見わたすが廊下には誰もいない。

……姫野実衣奈か? もしかして後を追ってきたのか?

妙な緊張感と期待感を抱きながら、ゆつくりと後方を振り返る。すると、そこに――

「ひ、姫野さん!」

俺を心配そうに見つめる姫野実衣奈が佇んでいた。

周囲には昼下がりの暖かな空気と太陽の眩しい光が広がっており、それが彼女の放つオーラのようにも感じられる。

（どこか痛めてない? 本当に大丈夫?）

「だ、だ、大丈夫でゆふっ!」

（ぜ、全然、大丈夫、そう、じゃないけど……心臓が……なにこれ）

……ん? なんだろ? さっきまでの彼女と様子が少し違うような……?

よく見ると、彼女の身体もちよつとおかしい。

俺のヒロイン姫野実衣奈は、学内で一番存在感のある人間である。俺くらいのガチ恋勢になると、遠くからでも彼女の存在を認識できるほどだ。

しかし、目の前の彼女は信じられないほどの透明感がある。そこにいるのにいないような、まるで蜃気楼のような儚げな存在にも思えてくる。

……っというか、透けてね?

透けてるよ! だって、後ろの階段が彼女の身体越しで見えるもん!

階段を上がつてくる生徒の姿も確認することができた。

ちよちよちよ! あれも姫野実衣奈じゃないか!?

目の前にいる姫野実衣奈越しから、階段を上がつてきた姫野実衣奈を確認する。

ちよつと何を言ってるのか俺にも分かんねえ。

「ああ、よかったです、まだここに居たんですね。元気に動けるようで安心しましたが、念のため病院で診てもらったほうが良いと思いますよ?」

階段を上がつてきたほうの姫野実衣奈が、俺に気遣いの言葉をかけてくる。

「ひ、ひひひ姫野さん……?」

混乱の原因は憧れの女子生徒との会話だけではない。

「おや? 私のこと、ご存じだったのですか?」

（あれ? 私のこと、知ってたの?）

俺の問いかけに、同時に反応する二人の姫野実衣奈。一人は礼儀正しく、もう一人は宙を漂いながら、ぶっさらばうに答えた。

……宙漂ってんじゃない! 幽霊? 幻覚? どっちにしてもヤバい、逃げろっ!

（あ、ちょっと! なんて逃げるのー!）

姫野実衣奈との会話だけでも心臓が破裂しそうなのに、こんな怪奇現象に遭遇したら逃避したくなる!

俺は急いで自分の教室へ逃げ込むことに――

「こらあ早乙女、たるんでるぞー。もうホームルーム始まるから席につけー」

教室に入った瞬間、担任の女性教師からお説教を食らってしまった。

そういうホームルームの時間だったな。なんか非現実的なことが起きたせいで、クソみたいな日常に安堵感を覚えるぞ。

（ねえ、なんで逃げちゃうかな?）

「ぶぶぶううう!」

窓際最後尾の席につくと、さきほどの透明少女が後ろからヌルッと顔を出してきた。

「おい早乙女、うるさいぞ。静かにしろ」

担任から注意を受けてしまったが、むしろ、この幽霊に突っ込んでほしい!

……つてか、視えてないの?

透明な彼女の様子を恐る恐る窺ってみたのだが――腕組みをして、俺に突き刺すようなジト目を向けていた。

（私は、ただお礼が言いたいだけなのにな……）

俺……疲れてんのかな、ははっ。

内容が頭に入ってこないホームルームが終わり、翔真が俺を茶化しにやってきた。

「乙綺がクラスで目立つ行動を取るの珍しくね? なんかあったのかあ?」

「な、なんもねーよ」

窓枠に腰掛けてる女の子をチラ見しながら答える。

（早乙女乙綺くんっていうのかあ。隣のクラスだったんだね）

か、かのじよは姫野実衣奈なのか? 声も顔も完全に姫野実衣奈なんだが……透けて浮いている以外。い、いや、性格も少し……だいが違うぞ……?

「どうした乙綺？ そんなに窓の外を気にして。オレはバイトだから先に帰るぞー」

「あ、ああ……また明日な」

窓の外……か。どうやら、翔真にも透明な彼女は視えていなかったっぽいな。

「よっ、乙乙、宿題忘れんなよー」

「乙乙くん、乙かれーっす」

クラスメイトたちが、俺を馬鹿にするような言葉を並べて教室から出ていく。彼らにも彼女の存在は視えていないようだ。つか、その呼び方はやめろ。

（乙乙くんかあり、可愛いね。私も、そう呼んでいい？）

好きな女の子に乙乙とか呼ばれた日には、ショックで寝込む自信あるわ。

早乙女乙綺。なんだこのゲシュタルト崩壊を起こしそうな名前は。名前が乙ってんだよ。えー、可愛いのかなあ

……………あれ。今、俺、口に出してないよな。心のなかでボヤいてただけだよな……？
（ねえねえ、そんなことより可愛い女の子が近づいてくるよ？）

脳内が情報の大洪水に見舞われていたとき、よく見知った顔の女が俺の席にやってきた。
「乙綺ー、友達にカラオケ誘われたんだけど、一緒に行かない？」

クラスメイトの椎名凜音が、ロングの茶色い髪を揺らして俺の顔を覗き込んでくる。

「行かね」

俺は早く帰って休むのだ。脳をリフレッシュさせなければならない。

「え、なんでよ？」

この不可思議な現象を消し去りたいからだよ！

「行きたくないから行かないの。じゃな」

この幼馴染の女。周囲の目を気にせず、いつも俺をリア充たちとの遊びに誘ってくる。

（お、お、幼馴染!）

腰近くまで伸びたストレートの長い茶髪。テニス部所属で、良い感じに引き締まっている身体。男子からの人気も高く、こうして俺と話をしているだけでクラス内から殺気立った視線を感じる。もちろん、殺気の矛先は俺だ。凜音のお友達さんたちだろう。

「あっ、乙綺ー、待ってよ！ ああもう！ 明日ちゃんと宿題忘れずに持つてくんのよ！」

俺だけに攻撃が向けられるのであれば問題ない。でも、凜音に良からぬ噂が立つのは嫌だ。凜音は悪いやつじゃないからな。というか、凜音とは家が隣同士で、小さいときからの付き合いなので家族の一員みたいなものだ。家族は大事にしないと。

（いいなあ、幼馴染！ ……それにしても、凄いなあ。お友達からの誘い、あっけなく断

つちゃった……」

幻覚を無視し、教室を出てしばらく歩いていると脳裏に嫌な言葉が蘇ってきた。

——額から次第に汗が流れ始める。

「宿……題？」

俺にとつてのモブクラスメイト、通称モブメイトや凜音がさっき言っていたな。

……明日、夏休みの宿題の提出期限だったわけ。はやく帰らねえと！

（へえ、片付いていて良いお部屋だね）

急いで帰宅した俺だったが、この異常現象の件は、ひとまず棚上げすることに。

俺には早急にやらなければならないことがあるからだ。

（なーに？）

夏休みの宿題である。

（え？ 夏休みの宿題まだ終わってなかったの？ 私も手伝おうか？）

うるさい、余計なお世話だ。

なぜ俺は幻覚に手助けされなければならないのか。完全にアホじゃないか。

しかし、不思議だな。目の前に幻覚がハッキリと視えているのに頭は全然痛くない。

むしろクリアに思考が働く。逆に怖い。

「今は幻覚よりも宿題が先だ」

集中すれば二時間くらいで終わらせることができる。だったら夏休みのうちに終わらせて

おけ、というのは野暮な話だろう。

（野暮じゃないよ。なんで夏休みのうちに終わらせておかないの）

無視無視。あーもう、ただでさえ低い集中力が、幻覚のせいで余計に削られてしまう。

勘弁してくれよ……。

（あ、今解いた漢字の問題の答え、間違ってるよ。完璧の壁の部首は『おうへん』だよ？
それだと壁になってるね）

……あ、ほんとだ。よくあるミスだよ。気をつけようね。

いつの間にか俺の隣に移動していた幻覚さんが、机に置かれた夏休みの宿題を指でさして教えてくれた。

「……」

——って！ なんで幻覚に間違い指摘されてんだよ！

え？ マジなんなの？ マジで、この幻覚なんなの？ 俺のお助けキャラ？

（あ！ また間違えてるよ。その間の選抜肢はアじゃなくてウだよ？ アは引っかけだ

ね)

「……………」

(次の解答も間違えてるよ？ 一学期に先生が、そこは間違って覚えやすい箇所だから気をつけるように、って授業中なんども話していたと思うけどなあ)

「……………」

ちくしょー！ ちくしょー！

なんで、こんなわけの分からん幻覚に注意されてんだよ！ 泣きたい。

その後も幻覚から指摘やダメ出しをされながら、俺は宿題を終わらせた。

なんだろう、普通にやるよりも早く終わったのだが、妙なストレスだけは残ったぞ。

「あーあ、やっと終わったあ。これで晴れて自由の身だあ」

(大げさだなあ。夏休みに終わらせておくべき宿題を片付けただけなのに。そもそも、勉強のパラメーターが少し低い気がするなあ)

パラメーター？ なんか幻覚にデイスられてね、俺……。

数学とか赤点ギリギリの成績だから文句も言えねーけど。

まあいい、今日は良いこともあったんだ。幻覚のせいで忘れそうになるが。

「ほんと、今日のはラッキーだったよなあ」

(ラッキー？ なにか良いことでもあったの？)

良いことなんてもんじゃないさ。あの憧れの姫野実衣奈だぜ!! 今、思い浮かべてみて可愛い顔が蘇ってくるよ。あんな間近で見れて、しかも身体触っちゃったもんなあ。

(あわわわあ！ い、いきなりそんなこと言われると……て、照れるよう……)

姫野実衣奈の可愛い顔を思い浮かべていると、顔を紅潮させながら両手をぶんぶんしている幻覚の姿が視界に飛び込んできた。俺が思い浮かべていた顔と同じ顔を持つ幻覚。

……なんでお前が照れてんだよ。

(ま、まあ？ 私も悪い気はしないけど……あ、ありがとう)

「いや、なんでお前に礼を言われるんだよ!」

思わず口に出してツツコンでしまった。

しかし、こうして間近で眺めてみると、完全に姫野実衣奈だよな。

(な、なにかな?)

幻覚は瞳に警戒の色を滲ませ、自分の髪をクルクルと指に巻きつけている。

ちよつと触ってみようかな……べ、べつに幻覚だし問題ないよな……?

彼女の手の甲に、俺の手をそつと差し伸べてみる。

(ひゃっ！ きゅ、急になに!?)

俺の差し出した手を振り払おうとした彼女だったが、俺に痛みは発生しなかった。なぜなら、彼女の手は俺の手を透過し、直接触れられなかったからだ。虚しく空を切っただけ。(うう)

彼女は涙目になって項垂れてしまった。

俺としては、彼女が非現実的な幻の存在であることを実感できたわけだが。

やつぱ疲れてんのかな……俺。勉強も部活も頑張ってるのに。

……よし、風呂に入って綺麗さっぱり全部洗い流そう。

一階の脱衣所に行き、浴場へ入る。そのとき――

(きやあああああああ！)

耳を劈くような甲高い悲鳴が風呂場に鳴り響いた。

なんのことはない……幻覚の悲鳴だ。なんで俺の入浴シーンにまで、くっついてきているのだろうか。悲鳴を上げたいのは俺のほうである。

(ちよっとお、ほんとにもう……どうしよう、これ……。貴方の裸を見つつ、一緒にお風呂入るみたいじゃないの……見てるこっちが恥ずかしいよう。か、隠しよう……)

そんなことを呟きながらも、顔を覆った両手の隙間から、チラリと俺を見ているようだが……。



「それにしても……今の悲鳴、ほんと姫野実衣奈まんだよな」

今日、間近で本物の悲鳴を聞いたからこそ、両者の声が一致しているのがよくわかる。身体を洗い終えた後、浴槽で疲れを取っている際も思考を巡らせる。ハーブの匂いがする入浴剤の香りが鼻腔を抜け、脳に冷静さを届けてくれるようだ。

……よし！ 今日早く寝て、明日からいつものおりの日常に戻ろう。それがいい。心身ともに疲弊していたので、お風呂から出ると、すぐにベッドに横たわってしまった。（今日は疲れてるみたいだから、明日ゆっくり説明させてもらうね。おやすみなさい）

「……………」

ああ、今日は本当に疲れた。姫野実衣奈との一件よりも、この幻覚に対しての疲労感のほうが強い。明日には消えているのかな。それを嬉しくもあり、ちょっとだけ寂しくもあり……そんなことを考えていると、いつの間にか眠りにについていた。

（おはよー！ 朝だぞー！ 遅刻しちゃうよー！）

なんだよ朝っぱらから、うるせーなあ。

「ふああ……今、何時だと思ってんだよ。まだアラームも鳴ってないだろ……」

欠伸混じりに寝ぼけ眼をこすりながら時刻を確認する。

「なんだよ、まだ六時じゃねーかよ」

七時起きのは俺は、あと一時間は寝られる。誰だよ、一時間も早く起こしに来るやつは。

（どう？ 疲れは取れた？）

ひ、ひひひ姫野さん!? なんで俺の部屋にいいい！

慌てて飛び起きた俺を、ベッドの横で心配そうに見つめている姫野実衣奈の姿があった。

……はあ、そうだった。そうだったよ。結局、この幻覚、消えなかったってことか……。

睡眠によって脳に変化があるかと思っただけ、そんなことはなかったようである。

（疲れよりも身体が心配だね。背中に痛みはない？）

ゆつくりとベッドから起き上がった俺を介抱するように、幻覚は俺の背中に掌を当ててくる。身体に触れることはないで直接的な温もりを感じることはない。しかし、その幻覚の行為に、優しい温かみを感じてしまったことは認める。

——身体は快調だ。問題は幻覚のほうである。

この幻覚に関して、俺には昨日から思い当たることが一つある。あくまで可能性の一つではあるが、その可能性は信じたくなかった。でも、まさかな……。

（んん？ やっぱり私のこと気づいてたの？ ま、それも当然だよな。昨日からこうして接しているわけだし、さすがに気づくよね？ そう、私は——）

「俺の作り出したイマジナリーフレンドだな!」

時刻は朝の六時過ぎ。俺の部屋に俺の声だけが響き、静寂が訪れる。

(……え? イマジナリーフレンドって、えっと……自身が生み出した空想上の友達ってことだよな? 私は違うよ、だって私は私だもん)

幻覚……もとい俺のイマジナリーフレンドが静寂を切り裂いた。

(だ・か・ら! イマジナリーフレンドじゃないってば)

俺は自分が信じられなかった。自分は妄想と現実をしつかり区別できる人間だと思っていたんだから。それが、この有様である。

現実逃避の妄想が、とうとう空想上の友達を生み出してしまったのだ。

(生み出してしまったのだ——じゃないから! 勝手に結論付けないでよう)

しかし、どうしたものか。生み出してしまったものは仕方ない。なんとかして消し去りたいところだが、方法が分からない。とりあえずコミュニケーションをとってみるか。

(うんうん、良い心がけだね。まずはお互いの自己紹介から始めようか)

「俺は早乙女乙綺だ。まあ自己紹介するまでもなく俺のことは知っているんだろ? 俺の深層心理だか表層心理だか知らないが、お前の正体はソレだろ?」

昨日から感じていたが、心の声を読み取れるのだから心理的なナニかだ。

(全然違うよ。さっきも言っただけど、私は私。私は姫野実衣奈だよ、改めてよろしくね)

彼女はウインクをして、握手するように右手を差し出してきた。

あーはいはい、姫野実衣奈ね。……って! 姫野実衣奈だと! ふざけんなあ!

俺は差し出された手を払い除け……ようとしたが、虚空を切り裂いただけだった。本物の姫野実衣奈だったら喜んで手を握るところだが、目の前の女は偽物だ。見た目が同じだからといって、俺の大好きな姫野実衣奈を名乗るとは図々しいにも程がある。

(急に怒り出して、どうしたの? べつに私はふざけてないよ?)

よりにもよって姫野実衣奈を名乗るのかよ……でも、待てよ? 俺の願望を反映して生み出されたとしたら、そうなのもおかしくないか。むしろ、そうなるのが当然か。姫野実衣奈と会話するの夢だったし、いつも妄想してたもんなあ。

(そうなんだ? でも、夢っていうのは大げさだよ。そんなに話しかかったなら、学校で声かけてくれれば良かったのに)

そんな簡単に言うなよ。お前には分からんかもしれないが、姫野実衣奈は学校のアイドルなんだろう。俺みたいなゴミが話しかけていい相手じゃねーんだよ。

(そんなことないよ! 話しかけるのに権利なんか要らない。少なくとも、私は貴方に話しかけられて嫌な思いはしないよ!)

お前にそう言われても……。でも、ちょっと嬉しいかも。まあ、なんだ、ありがとう。
 (うん！ それとね、お前じゃなくて姫野実衣奈だから。私も貴方のことを名前で呼ぶよ。
 早乙女くんがいいかな？ 乙綺くん？ それとも乙乙くん？)

なにこのラブコメ展開みたいなの。実際には部屋に俺一人しかいないのに、ちょっと幸せなんですケド。でも、乙乙だけはいらない……。

じゃあ……………乙綺くん、で。

名前を呼ばれるの好きじゃないけど、相手が幻覚の友達なら問題ない。

(りようかい。乙綺くんは私のことなんて呼ぶ？ 学校だとヒメって呼ばれてるけど) うん、知ってる。さすが俺の情報網。脳にもしっかりと記憶されているようだ。

じゃあ……………ミーナ、で。

(え？ えっと、名前呼び…………？ は、恥ずかしいけど…………う、うん！ わかった！)

モジモジして恥ずかしがっているようだが、俺も恥ずかしい。現実の姫野実衣奈相手だったらこんなこと絶対言えない。死ぬ。でも、これは空想上の姫野実衣奈だから問題ない。(空想上かあ。なんで私が本物の姫野実衣奈だと思わないの？)

思うわけねーじゃん。本物の姫野実衣奈の実体を昨日見てるし。それに……。(それに？)

ミーナは本物の姫野実衣奈と性格ぜんぜん違うんだもん。ミーナは砕けた感じで、ちょっと強気なオーラを発してんじやん。本物は、お淑やかで上品な女の子なんだよ。

(お淑やかで上品…………か。そうだよ、そう感じちゃうよね。私の普段の振る舞いと今の私とじゃ全然違うもんね…………)

こんな気軽に話しかけられる雰囲気じゃないし、俺だけのヒロインというよりも、みんなのアイドルって感じだな。

(な、なるほど。それで…………その…………乙綺くんは、そんな私を…………好いてくれているの…………かな？)

胸の前で手をモジモジさせ、上目遣いで訊ねてくる。さすがは俺の願望を反映させて生み出されただけのことはある。俺のツボを心得ているようだ。

しかし！ 俺が好きなのはミーナじゃなくて姫野実衣奈な。ここ重要。

(私じゃなくて、あの性格の私が好きなんだね…………)

彼女は俺の目から視線を外し、俯いてしまった。

急に彼女のテンションが下がってしまったようだ。イマジナリーフレンド相手なのだが、姫野実衣奈を傷つけてしまったようで居心地が悪い。フォロワーしておこう。

たぶん、俺が無意識に自分と話しやすいように改造しちゃったんだよ！ ミーナのせい

じゃないから気にすんな。

(……！　そ、そっか。そう思ってるのかあ……)

おう、だからミーナは、そのままの性格でいいぞ。

(今のままで……いい？)

ああ。今のミーナであれば自然に会話できるし、親しみやすい。

(……………そ、そう？)

気のせいかな？　ミーナの顔に元気が戻ったような気がする。

そして、アラームも元気に鳴り響いた。

七時か、学校行く支度しねーと。

(そうだね、続きはまた今度にしよう。学校生活は大切だからねっ！)

遅刻することなく学校に到着し、いつもと同じように自分の教室に向かう。

俺の通う高校は都内にある中高一貫の私立高校だ。すべてが普通の高校。そんな平凡な高校に、姫野実衣奈のような生徒が入学してきていることが異常なのだ。

(そう？　私はこの高校好きだけどなあ。制服は可愛いし、校舎も綺麗だよ)

女子の制服が可愛いことは一つのアピールポイントになるだろう。でもそれだけだ。

一学年六クラスで、一クラスの人数は三十五人前後。俺は五組、姫野実衣奈は六組。六組だけは少し特殊で、入学試験の成績上位者で構成されている。勉強面におけるカースト上位者たちだ。ちなみに姫野実衣奈は学年総代——つまり首席で入学した。入学式の挨拶の時点で、俺たちの学年は彼女を中心に動いていくことが決定したのだ。

(そんなことないでしょ。生徒たち一人ひとりの頑張りで学校を作り上げていくんだよ) はいはい優等生発言いただきました！。ヒロインにモブの気持ちちは分からないのだ。

こいつはモブが作り出したモブ以下の存在だけだな！

(なんか上げられたり落とされたりして、感情が追いつかないんだけど……)

普通の階段を上り、普通の廊下を進み普通の教室に入る。

(普通アピールはいいから。乙綺くんは私のクラスの隣だよね。今まで普通の——じゃなかった、廊下ですれ違っていたかもしれないね)

春の入学式の日から数えて、累計百十二回ほどすれ違っているぞ。

(なんでそんな細かい数字を覚えてるの!!)

俺のイマジナリーフレンドなら、そのくらい覚えておけよな。

(イマジナリーフレンドじゃないですう。あ、昨日のお友達だよ？　翔真くん、だっけ)

「乙綺おっすー」

「うーっす」

(なによ、そのやる気のない挨拶。朝なんだから、もっとシャキッつとしようよ)

「うつせーな、オカンかよ……」

「は？ オカン？ 乙綺よ、新学期はじまったばっかで寝ぼけてんのか？」

「あ、いや、ちが。今のは忘れてくれ、ちよつと寝ぼけてたかもしれん、あはははは」
ミーナのせいで変に思われてしまった。

(私のせいじゃないもん。それにしても、乙綺くんは翔真くんと仲良いんだね)

ああ。バイトが忙しいらしくて、プライベートで遊ぶ機会はないけどな。

(へえ、アルバイトなんて偉いなあ。学費を稼ぐためとか、そういう理由かな？)

違う。散髪代や衣服代やら、女子ウケするレストランとかを調べるための費用稼ぎらしい。そのために、コンビニやらゲーセンやら、いろんなバイトを掛け持ちしてるらしいぞ。遊園地のお化け屋敷で、お化け役をやったりもしているそうだ。涙ぐましい努力だな。(な、なるほど。でも、それでも偉いと思うよ。自分磨きってことでしょ？ 他人のために自分を高めるって、なかなかできることじゃないよ)

本当に他人のため、だったらな。こいつは、ただの下心全開の男子高校生だ。

「おいおい、乙綺？ なんかオレを蔑むような目で見てねーか？」

「き、気のせいだ！ それより、なんか新しい情報あるか？」

「おう！ よく聞いてくれたぜ！ 今もつとも熱い、とっておきのヤツがあるぜ」

(情報？ なんの話をしてるのかな？)

「なんと、三組の女子の中で人気ナンバーワンの白石さんに、彼氏ができたらしいぜ！」

「マジかよ!? 白石さんって、四月から数えて計八人の男子を振った人気女子じゃねえか。相手の男どんなやつだよ」

「相手は、どうやら年上の他校生らしい。なんでも夏休み中、海でナンパされたらしいぜ。んで、そのまま付き合うことになったとか」

「うへえ。いかにもリア充って感じだな」

(えっと、乙綺くんたちの会話の内容がよく分からないんだけど……えとえと、その、女子生徒の恋愛事情について……で、合ってるのかな？)

充分わかってるじゃないか、そのとおりだ。

「——ただ、乙綺が一番気になるであろう『彼女』の情報は、なにも入ってきてねーな」

「そうか、そりゃ残念だな」

(『彼女』って誰のこと？)

俺と翔真の会話に興味津々で割って入ってくる『彼女』。

「まあ、『彼女』姫野実衣奈に關してなにかあったら、オレのもとにすぐ情報が入ってくるから、少なくとも彼氏ができたなんてことはないな。安心しろ」

（つて！ 私のことかあ！）

そんな大げさに驚かなくても……。

「昨日、姫野実衣奈になにかあった、って情報は入ってきてないか？」

「いんや、なにもないな。言ったら？ 彼女みたいな学校のアイドルになにかあったら、すぐに知れ渡るって。姫野実衣奈の人氣は白石さんの比じゃないんだからさ」

（え、そ、そうなの……？ 私になにか起きたら、翔真くんに全部知られちゃうの？ ちよっと怖いな……）

ああ、こいつの女子に關しての情報量と、そのコネクションを甘くみないほうがいいぞ。（うーん、そんな偉そうに言われてもね……。ただ、その、氣になるのは……私って、そこまで目立ってるのかな……？）

「はあ!? それはなんの嫌味ですかあ!？」

「乙綺いきなりどうしたん!? 嫌味もなにも、姫野実衣奈はめっちゃ人氣あるだろ。乙綺だってよく知ってんだろ。誰も姫野実衣奈と乙綺を比べたりなんかしてねーよ」

「あ、ごめん……。うん、そうだな。うん、ちよっと誤解なんだけど、なんだろ。軽く

傷ついた」

そうだな、俺と姫野実衣奈をわざわざ比べるようなやつなんかいないよな。

くそ、ミーナのせいで、また俺が変に思われた。

（まーた、私のせいにしてる）

それに、こいつはミーナであって姫野実衣奈ではないのだ。冷静に対処しよう。

——ちなみに、俺の大好きな姫野実衣奈は超絶人氣がありまーす！ 男子のほぼ全員が憧れていまあーす！ 目立つなんてもんじゃないでーすう！

（そ、そうだったのかあ……。でも、どうしてかな、少しイラッとした氣がするよ。ぜんぜん冷静に対処できてないじゃんつ）

ミーナも声だけは本物だから、BGMと思えば心地良いかもしれない。

（それとね、さっきの白石さんの話だけ。白石さん、その他校の男子生徒とは夏休みのうちに別れちゃったみたいだよ？）

へ？ そうなの。ありゃー短い期間で終わっちゃったんですね。ひと夏の思い出ってやつですかね。やつぱり、リア充さんたちのことはよく分かりますなあ。

……つて！ なんでミーナがそんなこと知ってんだよ!？」

（なんでつて、私と白石さん同じバドミントン部だもん。夏休み最後の部活動の日に、女

バドの子たちと、その話をしてたんだよ)

なんでつてのは、なぜ俺の空想上の友達のみーナが俺の知らない情報を知ってんだよ、つてことなんだが。

(それは、私が乙綺くんの空想上の友達じゃない、からだよ。昨日やった宿題のこと覚えてる？ あのとときだつて、乙綺くんの知らないことを私が話していたでしょ？)

うぐつ、そういうええそうだな。うーん、うーん、なぜだ？ 俺の脳がフルに活性化して、自分でも覚えていないような知識を掘り起こしたのか？ だとしたら俺は天才なのかもしれない。これから勉強はみーナがやってくれそうだな。

(調子良いこと言わないのつ。勉強は自分でやらなきゃダメだよ)

でも、白石さんの件はどうなのだろうか。俺はみーナに聞かされた情報を絶対に知らなかった。断言できる。俺と白石さんなんて、接点なものもないもん。向こうは俺のことなど全然知らんだろうしな。泣きたい。

(白石さんの話は、ここだけの秘密だよ？ 私もつい話しちゃったけど、友達恋愛事情を陰で教えちゃったことは反省してる)

念を押すように、彼女は唇に人差し指を当てて沈黙を促してる。

「なあ翔真。さっきの白石さんの話だけだよ。すでに別れた、なんて追加話はないか？」

(ちよつとお！ 人の話、聞いてた!)

「それはないな。別れてる可能性もあるけど、付き合い始めたのが夏休みだぜ？ さすがにまだ早すぎるだろう」

「そうだよな。まあ、また何か情報仕入れたら、よろしく」

「おう！ 今度は、ご期待に添えられるよう姫野実衣奈の情報をゲットしてくるぜ！」

(そんなのは要らないから！ どこから情報が流れているのかな、まったく)

翔真は悪いやつじゃないんだ。俺以外には情報を漏らさないし、相手が嫌がるようなこともしない。こうやって話すのも、女つ気がない俺らの暇つぶしみたいなもんだ。悲しい。(な、なるほど。でも、翔真くんが、どういうポジションのキャラなのかは分かっちゃ)

ん？ キャラ？ なにか引かかる言い方だったが、そのまま会話を打ち切った。

——そして放課後、翔真から決定的な情報を突きつけられる。

「乙綺！ 大変だ！ 乙綺の言うとおりだったぞ！」

「なにが？」

「白石さんだよ白石さん！ 彼氏できたつて話を今日の朝したろ？ どうやら、夏休みのうちに別れちゃったみたいだぜ。ひと夏の思い出つてやつだな」

(あ、乙綺くんと同じこと言ってる)

「マ、マジなのかよ……嘘うそだろ……おい」

「シヨック受けすぎだろ。ただ、この情報は、まだ一部の女子にしか知られていないトッブシークレットだからな、誰にも話すなよ?」

「ああ、わかった……情報サンキュ」

(この親友キャラ凄すごいね。本物じゃないの?)

親友キャラ? 本物?

「じゃあ、オレはこれからバイトだから先に帰るわ」

「お、おう……」

取り残された俺は冷静になって考えてみる。

ヤバイ、ミーナって本物の姫野実衣奈なんじゃね……!?

(やっと認めてくれたかあ。もっと早く気づいてよねっ)

——教室を出て、昨日、姫野実衣奈を助けた階段に向かう。

えつと、そ、その、ひひ姫野さん? 昨日ここで会った出来事、お、お覚えてます?

(い、いいいきなり緊張きんきょうしすぎでしょっ! そ、それと、私のことはミーナでっ)

そ、そうだった、ミーナだった! っていうか、本物の姫野実衣奈だと思うと緊張感ハンパないが、なんでミーナも俺相手にキョドってんだ?

(今の私と乙綺くん、心拍を共有してるから心臓の高鳴りが直接伝わってくるんだよっ)
さらにミーナから、俺と触覚情報などの感覚を共有していること、俺と距離的に離れられないということ、実体の姫野実衣奈とは独立した存在であるという説明を受けた。

そんなことになっていたのか……昨日の風呂ふろのことを思い出すと死にたくなるな。

(そ、そのことは思い出さなくて、い、いいから!)

そ、そうだな……記憶きおくから抹消まっしょうしておこう……。

んで、ミーナは、この階段から転落したことを覚えてるのか?

(うん。私は昨日、たしかにこの階段で乙綺くんに助けられた……鮮明せんめいに覚えてるよ)

ミーナは踊り場の床ゆかに、指先を丁寧ていねいに触れさせている。よく見ると、触れてはいないが。俺が姫野実衣奈を助けた後、ミーナが生まれたってことなのかな。

(そうかも。私は気づいたときには乙綺くんの後ろに立っていたからね)

俺のイマジナリーなフレンドじゃなかったのか。はたして良かったのか悪かったのか。

(今の私は、私の——姫野実衣奈の思念体ともいえるべき存在だよ)

思念体? 精神体の一種だと思ふが、すっげえフィクション臭しゅうがするぞ……。

(なーに、その目は? すっごい疑ってない?)

う、疑ってないって。それよりも、ミーナは自分の身体からだに戻ることはできないのか?

(……できないんだよ。それに、このままの状態でしたら、いずれ私は消滅してしまうかもしれない。この姿で一日過ごしただけで、自分の存在が弱まっている自覚があるの)

マジかよ……なんか、すげえ大事になってたんだな……。

(うん。しかも、そうになったら、実体の私にも何かしらの影響が出るかもしれない)

姫野実衣奈の身に異変が起きる可能性があるってことか!? マズいな、それは非情にマズいな……ミーナのことも気になるが、姫野実衣奈のことも心配だ。

ミーナを元の身体に戻す方法はないのか? この状況を作り出した責任の一端は俺にもあるんだ。だから、俺は協力するぞ。

(ふふっ、それは頼もしいな。ありがとっ!)

はにかんだ表情のミーナに少しドキッとしてしまった。いつも目で追いかけていた姫野実衣奈以上の破壊力がある。不意打ちズルい。

(えっと、方法なんだけど、私の実体と乙綺くんが接触すれば元に戻るはずだよ)

接触!? 接触ってなに? 簡単なことなのかな……俺にはハードル高そうなんだが。

(私は今まで乙綺くんのことを知らなかったの。でも今は、この階段で自分を助けてくれた男の子っていう認識になってるから、話しかけるハードルは前より高くないはず)

俺のことを知らなかった、という言葉に地味にショックを受けたが、気にしたら負けで

ある。こんなことで傷ついていたら、非モテ男子なんてやってられないのである。

(ごめんごめん! でも大丈夫だよ、なんか昨日は実体の私相手に緊張していたようだけど、私とは普通に話せてるし問題ないって)

俺が緊張していた相手は姫野実衣奈で、普通に話せる相手がミーナな。

(同一人物なのに!! 実体の私にも同じように接してくれば、すぐ戻るのになあ)今朝も話したけど、ミーナは姫野実衣奈と性格ぜんぜん違うんだもん。

(……………ま、まあ、これが私の素、だからね)

え、え、え? ええ! なにそのトンデモ告白! 嘘だ嘘だうそだウソダー!(失望させちゃった……かな? ごめん。でも、事実だから仕方ないんだよ)

つまりはその……姫野実衣奈は学校では完璧な生徒を『演じている』ってこと?

(その表現、私としては少し本意ではないなあ。周りに合わせて良い顔をしていたら、いつの間にか、あの自分ができ上がっていたの)

マジかよ……俺の姫野実衣奈は上品で気配りがあって、温和な女の子なのに……。

(乙綺くんが本物だと思っている私は、私の外向けの顔だよ。つまり、あっちが偽物なの)

あの姫野実衣奈に、こんな裏の顔があったなんて!

「あ、まーた、私のこと茶化してるしい」

「こんにちは」

踊り場で戯れ……真剣な話し合いをしていた俺の耳に、ミーナの挨拶が届く。

「ああ？ 今頃、急に挨拶してきて、どうしたよ」

ミーナに向かって投げやりに応えた俺だったが、目の前の透明な彼女は首を傾けていた。

「へ？ 私？ なにも言っていないよ？」

いや、たしかに俺の『耳』にミーナの声が聴こえた！ そう……脳内ではなく耳に。

「急に声をかけてしまい、ごめんなさい。昨日のこと、改めてお礼を伝えにきました。

身体に痛みはありませんか？」

「あ、あ、ああ!? は、はいいいい！」

「なんだ、私じゃん」

うん、私だね。姫野実衣奈だね。あはは……声が裏返っちゃったよ……どうしよ……。

「ここここ、こんに、こんにちはっつ!!」

「ちよっ、いきなり声が大きいつてば！ つていうか、今頃、挨拶してるのどっちよお！

あ、心臓の鼓動がっ、あう、ううっ、はああうっ！ 心臓飛び出そう……っ!」

ミーナは頬をピクピク痙攣させて緊張していた。鏡越しに映った俺のようである。

「……………。昨日は、本当にありがとうございました。身体を大事にしてくださいね。それでは、失礼します」

姫野実衣奈は、俺に深々とお辞儀をして階段を下りていった——

踊り場に取り残された俺……とミーナ。

「はあはあ……こ、これは一筋縄ではいかなそうだね……」

まだ鼓動の余韻が残っている。それにしても、まさか二日連続で天使と邂逅するとは。

（天使——じゃなかった……私の実体に対してだと、乙綺くんの心臓はこうなるのかあ）

分かったか？ あ、姫野実衣奈と接触とか、ハプニングが起きない限り厳しいと思うぞ。

（なるほど、これは作戦を考える必要がありそうだね）

その後、ミーナは一人でブツブツと呟きはじめた。

——と思ったら、階段の上から、またしても女の子の声が聴こえてきた。

「おーい、乙綺ー、こんなところでヒメと何の話をしてたの？」

この楽天的な話し方は間違いなく凜音だ。顔を見なくても分かる。

（あ！ 幼馴染ちゃんだあ！）

なぜ、ミーナはそこに食いついているのだろうか。昨日も騒いでいた気がするぞ。

「凜音には関係ねー」

「ちょっとお！ なによ、その言い方！ 凜音ちゃん可哀想でしょ！」

いいの。俺と凜音はいつもこんな感じだから。つーか、凜音に見られてたのか。

「まあ、そんなつれない態度取っちゃって。まあそんなところも乙綺らしいけどねえ」
 「おお、さすが幼馴染！ 全部わかってるのかあ。そうだよ、幼馴染だもんねえ」
 やべえ、凜音以上にうるさいかも……物理的に。

「つーか、凜音こそ、なにしてんだよ。はやく帰れよ」

「んつとさ……今日、一緒に帰らない？ どうせ家も隣なんだし」

「はあ？ ほかの生徒に見られたら噂になるだろ。俺は嫌だね」

「ええー、いいじゃん。あ、もしかしてさ？ アタシが女子ってこと意識してるう？」
 したり顔を俺に向けてくる幼馴染。

（むう？ むむむ？ 凜音ちゃんの、この反応は……？）

隣で俺たちの会話を聴いていたミーナが、凜音を覗き込んで唸っている。謎だ。

「してねーし。女子っていうか、凜音は凜音だからな」

「なにそれ。まあ今日は部活もないし、二人だけなんだし。一緒に帰ろ？」

二人だけじゃねーんだよ、ミーナもいるんだよ！

俺は凜音に腕を掴まれ、半ば強引に引きずられるようにして校舎の外に出た。

マズいぞ、こんなところを誰かに見られたら……。

（それにしても、凜音ちゃん相手だと全然緊張しないんだね！）

幼馴染だからだ。女子として意識する必要がないからな。

（ふーん？）

ミーナは含みのある笑みを浮かべ、俺と凜音の周囲をブカブカ漂っている。

「乙綺と二人で帰るの……久しぶりだよ。小学生のとき以来じゃない？」

「こうして引きずられながら帰るのは初めてだと思っぞ」

「へへへっ、たしかに初めてだね！」

（小学生のとき以来かあ……もしかして、私の実体と乙綺くんが話していたのを目撃しちゃったから、誘ってきたのかな!!）

なんでそうなる。

（んーと、なんとまあ。でも、なんで最近まで一緒に帰らなかったの？ せっかくの

幼馴染なのに！）

小学生のとき、ウチの両親が離婚して色々ごたごたしてたからな。

（……ごめん、踏み込んだ話になっちゃったね）

べつにいい。ガキの頃の話だ。

それと、幼馴染と一緒に帰ることは普通ないからな？

(ええー、そんなことないでしょ。私が乙綺くんなら、凜音ちゃんと毎日一緒に帰るよ) なぜか凜音に執着するミーナは無視しておこう。今は急に俺を誘ってきた凜音の行動のほうに気になる。俺から手を離れた凜音の表情を窺ってみる。

凜音は、なにか照れているような、気恥ずかしそうな表情を浮かべていた。自分から誘っておいで、なんで顔を赤らめているのだろうか。

(これはまさか……鈍感系なのかな!?)

「そろそろ文化祭の準備が始まるね」

凜音は足を止め、来月おこなわれる学校行事の話を持ち出してきた。

「ん？ ああ、そうだな」

(せっかく幼馴染が話を振ってくれてるのに、全然興味なさそうな反応してるし……)

実際、興味ないしな。

「相変わらず、乙綺は学校の行事には興味なさそうだね」

「俺のことはいいだろ。そういう凜音は文化祭で何かやるのかよ」

「アタシ？ アタシはテニス部の出し物の当番を任されてさあ。来週から準備で忙しいんだよね」

「ふーん」

「もっと興味持つてよー、当日はソフトクリームつくるから乙綺も来てよね！」

(絶対行くよお!)

ミーナは目を輝かせて、俺よりも早く凜音に反応する。そんなにソフトクリームが食べたいのだろうか。まあミーナも年頃の女の子だしな、甘いものとか好きなんだろう。

「暇だったら行くわ。でも、俺にも、やらなきゃならんことがあるからな」

ミーナを元に戻すっていう重要な使命がな。

「え、なにそれ？ 文化祭よりも大事なこと？」

「ああ、そうだな」

「……………もしかしてさ、ヒメ絡みの話だったりする？」

凜音は神妙な面持ちで訊ねてくる。

「な、なんで彼女の話になるんだよ……………つーか凜音には関係ねーし」

「はあ……………やっぱりか。乙綺がヒメのこと好きなのは知ってるよ？ でも、そのさ…………」

「さつきから急になんだよ。意味不明すぎるぞ」

「……………ううん、ごめん、なんでもない！ お互い頑張ろうね！」

勝手に話を始めて勝手に話を終わらせやがった。相変わらず謎な幼馴染だ。

(か、か、か、可愛いいいい！)

「ぶぶうう！ ちよつ」

「乙綺、なに噴き出してんのよ!？」

だって、ミーナが急に大きな声だして、はしゃぐんだもん。こつちも謎すぎんだよね。

(これは理想の幼馴染キャラだよ！ すぐにルート入りを目指さないと！ ハアハア)

いきなり呼吸も荒くなってるし。自分の話されてたんだぞ、そつちを気にしろよ……。

(この世で最も尊いのは幼馴染と妹なの！ 主人公に「途な幼馴染と主人公をお兄ちゃん

呼ぶする健気な妹。ポツと出のメインヒロインなんかよりも、ずうっと絆が深いの！)

ミーナが、めっちゃ早口で語りだした。もはや、なにを言っているのか理解不能である。

最も尊いのが二つあるのも意味不明だし……。

「乙綺にい、一緒に、かーえろっ!」

(そうそう、こんな感じで主人公に懐いていて、抱きついてくる妹……んんんっ?)

女子二人の会話に混乱していた俺に、小さなツインテール娘が抱きついてきた。

「あ、陽茉莉！ なにやってんのよ!」

なんだ陽茉莉か、驚かせるなよ。まあ、こんなこととするのコイツくらいしかいないけど。

月宮陽茉莉。中等部の三年で、俺の中学時代の友人兼後輩。俺のことを兄呼ばわりする



が、妹ではない。月と太陽の髪飾りは自身の性格の二面性を表しているとか。

(い、妹お!? 乙綺くんには、世話焼き幼馴染だけじゃなくてロリ系妹までの!!)

だから妹じゃねーし。幼馴染も世話焼きどころかウザ絡み系だし。陽茉莉は口リだけど。

「おい、陽茉莉。お前は中部部なんだから、高等部の敷地に入っけきちゃダメだろ」

「ええ、もう放課後だからいいでしょ? 昨日、乙綺にいとと一緒に帰ろうと思ってたのに、先に帰っちゃうんだもんっ。だから、今日は校門で待ってたの」

夏休みの宿題をやるために急いで帰ったとか、先輩として恥ずかしくて言えない……。

「陽茉莉ごめんね。乙綺は今日、アタシと一緒に帰ることになったから」

凜音も中部部からの内部進学組なので、陽茉莉とも顔見知りだ。

「じゃあ、みんなで一緒に帰ろ? 方向一緒だしさっ」

「うう……陽茉莉、後輩なんだから気を利かせなさいよ……」

「凜音ねえ? なんか言った?」

凜音と陽茉莉は先輩後輩というよりも姉妹みたいな関係だな。

(なにこの天国みたいなポジション。私の平凡な高校生活とは世界が違う……)

なに言っただ? 姫野実衣奈の世界は華やかで、俺の日常はクソだぞ。

(乙綺くんの性格が今ようやく分かった。これは作戦を立てる上で、一考の余地ありだ

ね)

さっきから言っけることが意味不明なんですけど!!

「ったく、なんでもいいが、俺は帰るぞ。色々あつて疲れたからな」

「あ、待ってよ乙綺」

「乙綺にいい、置いてかないでよう」

(乙綺くん……その選択肢は最悪だよ。全員の好感度を下げてる)

幼馴染、後輩、思念体の三人を無視して歩き出した俺だったが、結局みんなで帰ることに。ミーナは自動的に付いてきてしまうのだが……。

——帰りの電車のなか。帰宅ラッシュと重なり混雑する車内で、運良く三人とも座ることができた。残る一人は座る必要がないので、宙に浮いている。

電車内では、女子高生の集団や男女混合の学生たちの騒ぎ声が、BGMのごとく大音量で聴こえてくる。

「文芸部は相変わらずか?」

椅子の前方部分に、ちよこんと座っている右隣の陽茉莉に訊ねた。

「……うん。乙綺に卒業してから、わたし一人になっちゃったよ」

「一人かあ、高等部に進学するまで寂しいよねえ」

両手を頭の後ろで組み、椅子に深く腰掛けている左隣の凜音が言う。

なぜ俺が凜音と陽茉莉の間に座っているのかは置いておくとして。

「高等部に上がったら仲間増えるぞ。高等部の文芸部は人数それなりにいるし」

「でも、乙綺には帰宅部じゃん。だから、わたしも高校では帰宅部になるつもり」

（こんな序盤なのにフラグ立ちすぎじゃないかなあ……）

フラグ？

「な、なに言ってるのよ。そんなに乙綺のあとをくつついていく必要はないの？ 陽茉莉

はアタシのテニス部に来なさいよ。帰宅部なんて、乙綺みたいに墮落するだけよ」

（女子バドミントン部も歓迎するよ）

凜音とミーナの勧誘合戦も俺へのデイスも置いておくとして。

「俺は、やりたいことがないから帰宅部なの。特技も長所もないし、趣味もない。平凡な毎日を送って、平和に暮らしているだけだ。陽茉莉は楽しいことを探せ」

「楽しいことか………乙綺にいや凜音ねえと、こうして過ごす日常………かな」

「ったく」

「高校生になったら、恋人つくって遊びまくっちゃうかもよ？ あ、もちろん相手は乙綺

じゃなくて、べつの男子ね？」

「うーん？ わたしにはよく分かんないなあ。二人は恋人つくって遊びたいの？」

中学生陽茉莉の純粋な質問に、凜音は愛想笑いを浮かべている。なにこの薄ら笑い、マジで怖いんだけど。自分で話を吹っかけておいて答えないとか、先輩としてどうなんだ。

「俺は、そんな願望とうに捨ててる」

（……ふーん？）

ミーナが訳知り顔で俺を試すように見つめてくる。

「乙綺には高校で楽しいことないの？」

「ない」

そもそも、そんなもの期待していない。姫野実衣奈と会話でただで超満足。それ以上を望むなんて、雑魚モブの俺にはおこがましいってものだ。

（この卑屈さ、逆に良い感じかも。なるほどなるほど）

褒められてんの？ デイスられてんの？

「高校生も、色々大変なんだね……」

俺と凜音の失意の表情を見て、陽茉莉は高校生の実情を察した模様である。電車内では、馬鹿騒ぎしている学生たちもいるが、あれが陽茉莉の将来像とも思えない。

中学生から高校生になっても、俺の世界は大して変わらなかったな——そんなことを考えていると、騒ぐ学生たちの目の前で杖をついて立っている、お婆さんの姿が俺の目に飛び込んできた。

「ん？ 乙綺、なに急に立ってんのよ。降りる駅まだ先でしょ」

席を立った俺は凜音の言葉に返事せず、お婆さんのもとに歩み寄る。

「あ、あの。良かったら、せ、席、空きましたんで、どうぞっ」

俺は、たどたどしい口調でお婆さんに伝えた。

お婆さんは急に話しかけられたことに対し、怪訝な表情を浮かべることなく柔らかな笑みを俺に向けてきた。

「おや、まあ？ いいのかい？」

「ええ、ど、どうぞ」

「悪いねえ、ありがとう」

お婆さんは、ゆっくりお辞儀をして感謝の気持ちを表してくる。俺は、杖をたよりにフラつきながら歩くお婆さんに連れ添い、さつきまで座っていた場所へと誘導する。

「凜音。悪い、席を詰めてくれるか？」

「あつ、う、うん！ ……あ、でも、アタシが立つから乙綺が座りなよ」

「いや、いい」

俺の返答を聞くと、凜音は苦笑いを浮かべ、俺がさつきまで座っていた席に素早く移動した。お婆さんは会釈して、凜音が空けた席にゆっくりと座り、自分の脚を擦り始めた。

（お婆さん、脚が悪かったのかな……。それにしても乙綺くん、偉いな）

べつに大したことはしてないだろ。普通のことだ。

（普通のこと、か）

その後、お婆さんは数駅先の駅で降りた。降りる際、立っていた俺に律儀に会釈してくれたので、俺も軽くお辞儀をして見送った。

「乙綺って、昔からそういう行動力あるよねえ。観察力、っていうのかな」

再び座った俺に、凜音が感心したような口振りで言ってくる。なぜ、また俺が凜音と陽茉莉の間に挟まれて座っているのかは置いておく。

「ただのお節介だろ」

「そんなことないよ。わたしは、あのお婆さんのこと全然気がつかなかったもん。目の前にいた学生さんたちだって、誰も席を譲ろうとしなかったし。乙綺にいい、そういうさり気ない気遣いできるとこ、中学時代から変わってないね！」

陽茉莉は目を輝かせて俺に尊敬の眼差しを向けてくる。

……やめてくれ、そんな大層なことはしていないんだ。

(ううん、陽茉莉ちゃんの言うとおりでだよ。友達同士でいるときに、自分から率先して輪を抜け出すのって、意外と難しいことなんだよ……)

グルーブのやつから後で色々言われるのを気にするってことか。そういうところ、集団って面倒だよな。

(……………)

姫野実衣奈は誰からも愛される存在だ。彼女の周囲はいつも華やかで、物語の主人公やヒロインみたいに常にカメラのフォーカスが当てられている。

だから——俺だけに視える彼女の、どこか寂しそうな表情は本物の姫野実衣奈とかけ離れており、現実感がなかった。

(集団って面倒……か。そうだね、私だったら、あのお婆さんに席を譲れなかったよ。友達の目が気になるから……)

トーンの低い声は落ち込んだ雰囲気すら感じ取れた。

帰宅後。

勉強机の椅子に座る俺とベッドに腰掛けているミーナ。二人の物理的な距離は一メートル

ルほどあるが、テレパシーのように相手の頭に直接言葉を送れるので、精神的な距離は非常に近く感じる。お互いの身体がダイレクトに繋がっているかのようなのである。

(さて、それじゃあ、これからのことを話すよ！)

さつきまでの落ち込んだ様子が嘘のように、ミーナは興奮気味に話し始めた。

放課後に言っていた、ミーナを元に戻すって話だな？

(うん。乙綺くんの性格や周囲の環境を分析してみても、良い方法を思いついたの)

ま、まさか、俺の心臓を犠牲にするつもりじゃ……いや、姫野実衣奈のためなら、それやむを得ないか。

(私は悪魔か)

だってよお、俺と姫野実衣奈のやりとり見ただろ。つか、実際に感じただろ？ あれ

が俺の限界なんだよ。俺みたいなモブが男子生徒のヒロインである姫野実衣奈と、お近づきになれるわけねーんだ。天と地の差があんの。月とスッポン、提灯に釣り鐘、糠に釘だ。

(最後のはちよっとおかしいけど、言いたいことは分かった)

俺が勉強もスポーツもできて、イケメンだったら堂々と話しかけられるんだがな。

(だったら、自分の理想の姿になれるよう、これから努力していけばいいんだよ。そうすれば自分に自信もついて、私相手にも気兼ねなく話しかけられるんだよね？)

簡単に言ってくれるな。そもそも、努力してもダメだったから今の俺になつてんの。今の姿が、俺がこれまで歩んできた人生の結果なの。失敗例とも言う。

(なに、そんなこと胸を張って言ってるの。むしろ、卑屈になつているときのほうが堂々としてるのが不思議だよ……)

俺が姫野実衣奈と仲良くなるのは、とてつもない壁^{かべ}を乗り越えなきゃならんってことだ。早くミーナを元に戻さないとならないのに……スマンな、俺が雑魚モブで。

(乙綺くんには足りないのは自信と経験だね。やっぱり私の考えた作戦しかないみたい)

へ？ 作戦？ なにそれ。

(ふふふ、よく聞いて！ 今日から、姫野実衣奈攻略^{こうりやく} 作戦を開始するよ！)

……………は？

(まずは攻略対象ヒロインの情報収集。その次に、主人公の各種ステータスを伸ばす必要があるね。これは日々の反復練習で上がるから問題な——)

ちよ、ちよと待つて！ なにを話してるのか全然わかんないんですケド!?

(なにつて、ヒロイン攻略の手順だよ)

ヒ、ヒロイン？ 姫野実衣奈のことかな……。

(乙綺くんにとつてのヒロインと言えば、そ、そうなんですよ？ 仲良くなつて無事に接^せ

触^ふしてもらう。意図としては、私が戻るためつてこともあるけどね。乙綺くんにとつても悪い話じゃないでしょ?)

いや、さっきの俺の話、聞いてました？ 仲良くなる以前に、話しかけること自体が難しいんだつてば。これはもう、どうしようもないんだつて。

(どうしようもなくなつてば。女子の前で緊張^{きんちやう}しないためには、まずは慣れ。そして自信を付けることが大事なんだよ)

そんな簡単に今の自分を変えられるわけないんだが。

(私の実体と乙綺くんが交流するときに、私がアドバイスできるよう心拍数^{しんぱくすう}を抑えてもらうことが必要だからね。よぉし、燃えてきたぞお!)

あれ、なんか勝手に話を進められてる!?

(成功率を上げるために、まずはヒロインの情報を集める必要があるね!)

ヒロインの情報つて、あなたが全部もってるじゃないですか……。

(チツチツチ、乙綺くんが自分の目で直接確かめたほうが実感できるでしょ)

ミーナは人差し指を立てて左右に振り、俺を諭^{さと}すように言ってくる。

ニヤリと不敵に笑って俺を挑発してくるミーナさんが怖い。
ちようはつ

自分で本性とか言っちゃつてゐるし。まあ、本性ならすでに現在進行形で見てゐるけど。

(むむう、私じゃなくて、実体の私で確認するんだよ)

ミーナの実体——姫野実衣奈の今日の姿を思い起こす。

俺を心配そうに氣遣つてくれてたなあ。可愛^{かわい}かつたなあ、ぐへへつ。

(……っ！ も、もうっ！ そういうのはいいの！)

姫野実衣奈の顔を思い浮かべてヘラヘラしていた俺の目の前では、ミーナが腕組みをし、顔を赤らめていた。今日の姫野実衣奈とは雰囲気が全然違う。

……いつそのこと、ミーナのことを実体に話しちゃえばいいんじゃないかね？

（普通に話せるならいいけど、たぶん頭のオカシイ人だと思われるよ？ 特に、拳動不審な態度でそんな話をされたら、いくら私でも乙綺ちゃんと距離を取る可能性があるね）

なんてこった……俺はミーナの意味不明な作戦に乗るしかないのか……。

（大丈夫、私に任せて！ 目指せ、ヒロイン攻略！）

こうして、俺はヒロインと一緒にヒロインを攻略することになった。

つてか、なにそれええええええええ！

二章 ミーナと姫野実衣奈 ひめのみいな

翌日の放課後。ヒロイン攻略作戦を開始した俺たちは、現在、校門付近で待機中である。

姫野実衣奈の隠された情報を得るために、彼女の部活動が終わるのを待っているのだ。

月はじめの週末は学校帰りに寄るところがあるらしい。友達にも秘密にしてるとか。

……つか、隠されたものにも、表の顔も裏の顔もミーナを通して知っているのだが。（いいから集中して。対象に気づかれたら作戦が失敗しちゃうよ！）

対象——姫野実衣奈は女子バドミントン部のエースである。平凡な高校だが、女バドだけは魅力がある。なにせ、姫野実衣奈は夏休みにおこなわれたインターハイで、一年生ながらシングルス全国大会ベスト四まで進んだのである。全国大会出場など、我が校何年ぶりの快挙だったのだろうか。二期期の始業式で表彰された姿は記憶に新しい。

（まさか、その後に階段から転落するなんてね）

そんだけ有望なら、強豪校からも推薦のお誘いが来たんじゃないのか？

（推薦来たんだけどね）。私、寮生活が嫌だったんだ。推薦いただいた高校、寮生活が義

務付けだったからさ)

へえ、意外かも。ミーナは誰とでも上手く付き合えそうだし、友達同士で生活するのを楽しみそうな印象だった。

(そのことも、私の裏の顔を見ることで納得してもらえと思う)

なんだろう？ 寮生活だと何か不都合なことでもあるのだろうか。気になる。

数時間後には、その謎も分かるのだろう。それまでは、暑さに耐えながらここで待機だ。

——九月に入っても、うだるような暑さは変わらず、制服のシャツには汗が染みて身体にまとわりついてくる。

そんな太陽の熱に負けじと、グラウンドから運動系の部員たちの熱を帯びた声が耳に届いてきた。校舎内では吹奏楽部の演奏が響き渡っている。こちら運動部に負けないくらいの熱量を感じる。

今の時刻、いつもの俺なら帰りの電車の中なので、この熱気にあたることはない。

日中ともに生活している学生たちが、俺の知らないところで知らない活動をしている。

俺は自分の通う高校が、いつもと異なる色を見せ始めたような錯覚に陥った。

帰宅部の俺は疎外された気分になる。俺は彼らの活動の結果しか知らない。その結果に至るまでの努力に興味を持ったこともなかった。

結果が出ていないのだから、努力は無駄である。なら、努力はしないほうがいい、疲れただけだ。勉強や運動は出来るやつに任せて、自分は自分に出来ることだけをする。

そっちのほうが効率的なんだ。世の中も……自分も。

(できることって?)

それは、これから探していくんだよ。なんでもできる万能さんの目の前には選択肢がたくさん広がっているけど、凡人の俺の前にはそうそう簡単に姿を現さないの。

(誰だって、最初から何でもできるわけないよ。努力して掴み取っていくものだと思うけどなあ)

世の中には努力して手を伸ばしても、空振ってなんにも掴めないやつがいるんだよ。

——俺のようなやつがな。

(乙綺くんは、最初から悲観して諦めちゃっているだけのような気もするけど)

仕方ないだろ。今まで努力してもなんの結果も出せなかったんだから。俺が自分に悲観して諦めていたとしても、それで誰かに迷惑かけてるわけじゃないから問題ないし。

(結果って、そんなに大事な……)

なに言ってるんだよ。姫野実衣奈だって、良い結果を残すために今もこんな時間まで部活頑張ってるんだろ。良い結果を残せる、選ばれた人間なんだから。

(……私は、なんのために部活頑張っているんだろう)

ミーナは体育館の方向を向き、現在、部活動を頑張っているだろう自分の実体に対して疑問を投げかけているようである。

だから、良い結果を残すためだろ？

(ん、たぶん、違うかな。結果は追い求めているけど、それが続いている理由ではないよ。正直に言くと、途中で辞めるって言い出しづらいからかも。親にも友達にも)

え、そんなネガティブな理由なの!?

(そんなものだよ。乙綺くんは私に自分の理想を押し付け過ぎなの。私は乙綺くんが思っているような魅力的な人間じゃないんだよ)

その姫野実衣奈の裏の顔が、これから分かる、と……怖いような楽しみのような。

そんな俺の期待を察知するかのように、部活動終了の目安となるチャイムが鳴った。

おい、これからどうするんだ？

(下駄箱に私の実体が見えたら、少し離れたところに移動して尾行するよ！)

はいはい尾行ね、りようかい……じゃねえよっ!? なんて尾行すんだよ、完全にストーカーじゃねえかよ！ 俺を犯罪者にしたいのか？ そうなのか？

(大丈夫。もし巡回中の警官に職務質問されたら、自分にだけ見える彼女がそう指示した、

って言えばいいから)

………などと意味不明なことを話しており――

完全に犯罪者フラグが立ってますわ！ あかんあかん。

(バレなきゃ問題ないし、別にバレても問題ないんだよ。今日の私は、かなり警戒して帰ると思うけど、尾行スキル高そうな乙綺くんならやれる！)

尾行スキルなんて高くねーよ！

拳を胸の前で握りしめ、やる気満々なご様子のミーナさんである。

なんでそんなに楽しそうなんだよ。やってること完全に外道だからな。

(尾行なんて、刑事ドラマみたいで楽しそうなんだもん。相手が自分だから罪悪感ないしね)

俺には罪悪感しかねえよ！

(私は尾行くらいで騒ぐような女じゃないから安心して)

サラリと爆弾発言しないで。

(ほらっ！ 私が下駄箱に来たよ。いったん校門を出て、路肩に停めてある車の裏に隠れよ。あの位置からなら気づかれずに尾行を開始できる)

なんてこった、俺の覚悟が決まらないうちに尾行が開始されてしまうぞ……。

……それにしても、この女、やけに尾行に慣れてないか？

（どちらかと言うと、尾行を撒くほうが得意だよ。中学時代から男子生徒に付け回されていたからね）

あの顔だもんな、昔から苦労していたのだろう。つてことはアレか？ 尾行される立場だったのが、今度は尾行する立場になって燃えている、と。

（そういうこと！ 燃えるう！ 絶対に気づかれないで目的地まで辿り着くよお！）

……ミーナの遊びに付き合われているだけな気がしてきたぞ。

（集中して。……よし、校門を通り過ぎたね、ここからが尾行の開始だよ。適度な距離を保ちつつ、物陰に隠れながら移動するよ）

このストーカー、やる気満々である。俺は慎重に対象の視界に入らない位置を探して移動する。そんな俺の背中越して、目を輝かせながら尾行対象を確認するミーナ。

ミーナは隠れる必要はないと思うのだが……というか、対象と俺たちの位置関係よりも、俺とミーナのポジションのほうが問題だ。ミーナの興奮した呼吸音と吐息が耳に伝わってくるし、なにより……俺の妄想スキルが高すぎるせいで、ミーナの胸の感触を勝手に脳内補完して感じてしまっているのだ。

（お？ 乙綺くんも興奮してるようだね？ やる気出てきた？）

おおお、お、おう！ まあな！

適当に誤魔化して尾行を続ける。

姫野実衣奈は女バドの友達と思われる生徒達と下校しているようだ。いち、に、さん……全員で四人か。三組の白石さんもあるな。なに話してんだろ、すげえ気になる。

下校中のガールズトーク、青春だな。俺は青春ストーカー行為に勤しんでいるが。

（たぶん、大した話はないよ。顧問に対する文句とか、宿題ダルイとか近所の美味しいスイーツショップの話とか、来月の文化祭の話とか。まあそんなところだね）

ミーナにとっては、大した話ではないのか。

（私は周りに合わせて相槌打ったり、適当な意見を言ったりしているだけだよ）

そうなのか。少し離れた場所から観察している俺でさえ、あの四人の中心は姫野実衣奈だと感じているのに。その中心人物は話の内容に興味持っていないとか、皮肉なものだな。

（私が心の中で話の内容を退屈に思っているように、それを表に出していない以上、誰にも迷惑かけてないから問題ないでしょ？ ふふふ）

その論理、人に言われるとイラツつとくるな。俺も今度から自重しよう。

でもよ、文化祭の話にも興味ないってことか？ 凜音なんか、テニス部で出店やるとかで準備忙しいって言ってたじゃん。俺はともかく、姫野実衣奈が興味ないのは意外だ。

（凜音ちゃんの手作りスイーツには興味ある！ でも、文化祭自体には興味ないなあ）

マジかよ。とても学校のアイドルの言葉とは思えん。

（アイドルじゃないですう）

俺たちがそんな話をしている間に、学校の最寄り駅に到着。

尾行対象の集団は三人になっていた。そして、三人は上り方面の電車に乗り込む。俺の家は下り方面の電車なので家路とは逆方向へと進むことになる。

姫野実衣奈を隣の号車から監視する。和気あいあいと友達と会話しているようだ。あれが嘘の——友達を騙す作り物の笑顔だとは信じられなかった。いや、信じたくなかった。

（こらこら、人聞きの悪いこと言わないの。全部が全部嘘ってこともないし、友達ことは好きだよ？ そもそも女子なんて、本音を探り合いながらもあまり奥には踏み込まず、表面的な楽しさを求めるものの。悩みの相談をしている自分が好き、その相談に乗ってあげている自分が好き。そうやって良好な関係を築いていくんだよ）

非モテのコミュゼロの俺には別世界の話だぜ。でも、姫野実衣奈はやっぱりさすがだな。あの表情からは、そんな腹黒い思考を読み取れないぞ。

（腹黒いと言わないの。ん？ でも、たしかに妙だなあ。なんだか楽しそう……。私、あんな無防備な顔してたかな……？）

そう言われると、たしかに俺も違和感を覚える。一学期に観察してたときは、どこことなく洗練された雰囲気だった。親しみやすさの裏に、近寄りがたさも兼ね備えていたような——矛盾するけど、そんな雰囲気。今の彼女は、心の底から友達との会話を楽しんでいるような……いや、それにもなにか違う気がする。

（一学期に観察していた、というのはとりあえず置いておくとして。私も今の実体には少しだけ違和感がある……なあ）

頭からミーナが抜けて、思考回路に微妙な変化が生じたとか。腹黒い感情が抜けて、真っ白くて純真な姫野実衣奈になったのか？ ミーナはやっぱり悪だったのか！

（違うもん！ 私のほうがオリジナルの本物なんでもんつ！ そ、それなのに……ぐすん）

泣かないの。っていうか泣き真似しないの。

（まあ、実体に直接確認すれば早いんだけどね。でも、それができない以上、まずはこうやって尾行して、本性を確認してもらうしかないね）

さーせん。俺が不甲斐ないばかりに回り道になっているな。家に帰るのも回り道だし。自嘲していると、姫野実衣奈の友達二人が電車から降りた。

（あの二人の家は、この駅が最寄り駅なんだよ。私の家にはあと二駅だね）

俺の利用している駅と同じで、ここは特急が停まらない駅だ。姫野実衣奈の降りる駅はターミナルになっているので、複数の路線が乗り入れている。特急も停まる。

なんか負けた気がする。

（小さいことを気にしないの。普段、特急なんか乗らないもん）

小市民の言葉は貴族には届かないのだ。

その特急が停まる駅に、俺たちの乗っている各駅停車の電車が停まったが、姫野実衣奈は降りる気配がない。

（いちいち特急とか各駅停車とか言わなくていいからっ）

そして、そのターミナル駅で乗車客が大量に入れ替わる。姫野実衣奈は空いた席に座り、景色を眺めているようだ。周りはスマホ片手にディスプレイと睨めっこしている人間が多いので、姫野実衣奈の様子は少し浮世離れしているようでもある。

（私だって、いつもはスマホくらい見るよ。でも……やっぱり不自然だね）

見たところ自然な感じだけど？

（それが不自然なの。いつもなら周りに知り合いがいなか確認する。それに、乗っている号車も真ん中のままだし、迂闊にも程があるよっ！）

そうなの？

（いつもなら友達と別れた後、先頭か最後尾の号車に移動するの。それで、座席の一番端に座る。場合によってはマスクも付ける）

そっちのが不自然だろ！

（それにしても、あの間抜け面——隙だらけだし、私って端から見るとあんな感じだったのかな、軽く自己嫌悪だよ……）

友達と別れて一人になってからの姫野実衣奈は、どことなく穏やかな表情に見える。

——可愛い。俺の目には、間抜け面なんでものじゃなく可愛く映っている。

（むむむ。乙綺くんは私に対して甘すぎだよ。ううん、私には手厳しいけど……実体の私に対してね？ その優しさを、少しでもいいから私にも振る舞ってよお！）

俺は浮気しない主義なので。

（同一人物なのにいいい！）

——気づけば、都心と呼ばれるエリアまで来ていた。

それから五分ほど電車で揺られ、とある駅に着く。

（あ、ここだよ！ この駅で降りるよ！ はやくう、はやく降りてえ！）

慌てて姫野実衣奈の様子を確認すると、たしかにこの駅で降りるようだ。

俺は急いでホームに降り、対象を尾行する。

（実体の私、全然尾行に気づいてないね……まったく警戒してないみたい。張り倒したくなってる）

やめて。ストーカー行為だけじゃ飽き足らず、婦女暴行まで加える気ですか……。

さすがに金曜日の帰宅ラッシュ。大勢の人たちが駅の中を闊歩している。手に大きな紙袋をぶら提げている人。大きなリュックを背負い込み、足早に目的地を目指す人。サラリーマン風のスーツ姿の男性や若い女性。幅広い層が利用する駅らしく、対象から目を逸らすと、すぐに見失ってしまう自信がある。

このなかを対象に気づかれずに尾行するのは、なかなか難易度が高そうだ。

……というか、ここ。この駅って――

改札を抜けて外に出ると、

「明日オープンする新しいメイドカフェでえーす、よろしくお願いしまあーす」

舌つ足らずな声のメイドさんから、ティッシュ入りのビラを受け取る。

目の前の建物には大きなアニメイラストが掲示されている。

大通り脇の日陰の通路に並べられたカプセルトイのガチャガチャ。

周辺の店からは、どこかで聴いたことのあるアニメソングが流れている。

……って、ここアキバじゃねえか！

（そうだよ）

別にアキバは珍しくもなんともないんだが、あの姫野実衣奈が用事のある場所とは思えない。むしろ彼女の嗜好と対極に位置している場所ではないか？

俺は、たまに買い物に来るが熱心なオタクとは言えない。アニメは有名な作品を観るだけでブルーレイは買わない。ラノベは、アニメを観て続きが気になったものだけを買っている。ゲームも程々。人気の大作RPGと呼ばれるものくらいしかやってない。ソシヤデはログボもらうだけ。声優は全然わかんない。応援してるアイドルもない。

あれ、俺は何を生きて甲斐に生活してんだろ。勉強もしてねーし、部活もやってねーわ。（乙）綺麗にオタ趣味がないことは部屋を見れば分かるよ。今どき逆に珍しいくらいグッズ類を置いてないよね）

いやいや、俺より姫野実衣奈だろ!! こういうとこ毛嫌いしてそうないイメージなんだが。

（ほほー、私がアキバを毛嫌い、ねえ？）

なんか威圧感すごいんですけど!?

だって、リア充女子たちと渋谷とか原宿のショップに行ってるほうが、しつくりくるんだもん。オシヤレなショップ？ とかスイーツ？ とか。

（付き合いで行ったりはするけどね。さっきも話したけど、ソッチはあんまり興味ない）

ソッチは、つてことはコッチは……？

(めちやくちや好きいい！)

ちょ！ キアラが壊れてるつて！

つていうかマジかよ！ ミーナの言ってた本性つてのはオタ趣味のことだったのか！

(ま、まあ、そ、そういうこと……にゃん♪ 本当の私を見て欲しい……にゃん♪)

つぶぶうう！

ミーナは猫の手で、にゃんにゃんポーズを取っている。自分でやっておいて恥ずかしいのか顔が紅潮している。というか、いきなり豹変されても対応に困るのだが……。

(ノリ悪いなあ)。安心して、さすがに語尾に、にゃんを付ける属性とかはないからそれを聞いて安心しました。

でも、まだ俺は信じねーぞ。姫野実衣奈の、ここでの目的を確認するまでは認めねえ！

——尾行を続けると、姫野実衣奈はある店の前で立ち止まり、陳列棚に目をやってから店内に吸い込まれるようにして入っていった。

(このお店がゴール地点だよ。全然緊迫感のない尾行だったね)

俺も店内に入っていく客に紛れて入店する。今度は潜入ミッションである。

つーか人が多いな。あ、あれ？ 姫野実衣奈はどこいった？ やっべ見失ったかも！

(大丈夫、目的のフロアは分かるから。間違はなく五階にいるよ)

ミーナの指示どおりに五階に向かい、恐る恐るフロア内を確認する。

五階は下の階とは違い、それほど混雑ではなかった。客も五人くらいだろうか。

金曜日の夕食時なので空いてるのかな？

(うん、私が金曜日にココに来る理由でもあるよ。次の日が休みつてこともあるけどね)

そう、ここギャルゲー売り場だね。

……………つて！ おいしいいいい！

え、なにこれ……どうなってるの……。百歩譲って、オタ趣味があるのは分かった。うん、アキバが好きなのも伝わってきた。で、でもさ！ ここギャルゲー売り場だよ!!

お客さん全員男じゃん！ 全員歴戦の猛者みたいじゃん！

……………一人、女の子がいた。凄く美少女だ。このフロアに置いてあるパッケージから飛び出してきたようなヒロインがいた。その佇まいに、周りの歴戦の猛者たちも前かがみになっている。店員だけはその美少女、姫野実衣奈を見ても驚いた様子はない。

(店員さん、顔なじみだもん。オススめのゲームとか教えてくれる良い人だよ)

あは、あはははは、嘘だろ……おい。俺の姫野実衣奈がギャルゲーやるわけないじゃん。そういうのに耐性ない、奥ゆかしい可憐なアイドルなんだよ……。

（ツッコミどころ満載だね。奥ゆかしいし可憐でもないし、アイドルでもな〜い）
いや、奥ゆかしいだろ。ミーナはお風呂で俺の裸をみて恥ずかしがっていたくらいだし。
（お風呂……裸）

思い出しちゃったじゃねえかよおおお！

（思い出しちゃったじゃないのよおおお！）

落ち着け俺、落ち着け俺え〜。今はそんなことを思い出してる余裕なんてないはずだ！

（……も、もうっ。それより、私の実体を見て！ 今、手にしてるパッケージをずっと眺めてるよ。あの様子は、買い、だね）

なんであのソフトを言うって言い切れるんだよ？ 迷った挙げ句、別のソフトを買う可能性だってあるだろ。何も買わずに帰るかもしれないし。

（前にお母さんに指摘されたことがあるんだけど、私って何かを期待する前に左髪をかき上げる癖があるみたいなんだよ。無意識に、胸の高鳴りを紛らわそうとしているのかもしれないね。バドミンソンの試合のマッチポイントのときにもやってるみたいだし。それでね、今も左髪をかき上げたんだよ）

身内しか知らない新情報ゲットだぜ！

遠くから観察していると、ミーナの予想どおり、姫野実衣奈は手にしたパッケージをレ



ジに持っていった。

(それにあのソフト、先々月来たときにも買おうか迷ってたんだよねえ。それからずっとモヤモヤした気分のまま過ごしてたから、今日は買うと思った)

へ、へえ。先月はなんで買わなかったんだ？

(先月はインターハイで来れなかったんだよ。だから二ヶ月も我慢しちゃった。インターハイ出なければ、夏休みに満喫できたかもしれないのになあ。うう早くやりたいなあ！)

いやいや、インターハイと比べるようなものじゃないよね？

……あ、あれ？ 俺の基準がおかしいのかな。

(部活に所属してない乙綺くんから、そんな発言が飛び出すなんてね。ふふふ)

誰よりも中心で青春を謳歌してると思ってた人からの発言だったので、驚きました……。もしかして、全寮制の高校に進学するのが嫌だったのって……。

(寮生活だと、私の大好きなギャルゲーを堂々とプレイできないからだよ)

ははは……。

レジでお目当てのギャルゲーを買って、幸せそうな顔をしながらフロアを後にする姫野実衣奈を見送る。

(これで私のこと、分かってもらえたかな？)

……ハイ。

この出来事によって、ミーナが本物の姫野実衣奈であると確信する。

(実体だけじゃなくて、私の存在も認めてくれたようでは有意義な時間になったね)

……ああ。そして残念だったな。あのギャルゲー、ミーナはプレイできなくて。

(っ!? ああああああっ！)

落ち込むミーナをなだめながら秋葉原駅に向かう。

(うつぐ、うつぐ……うつぐすん)

いい加減、機嫌直せよ。

(うわあーん！ だつてだつて！ あのソフト二ヶ月も我慢したのに、私はプレイできないなんて！ なんのためにインターハイ頑張ったんだよ……うう)

自己実現？ 掲げた目標に辿り着くため？ そういうものために頑張ったんじゃないか？

(……ぜんぜん説得力のないフォローだね。さすがは帰宅部)

いつになく辛辣な言葉を吐かれる。

一つ訊きたいんだけどさ、ミーナって姫野実衣奈の中に戻ったら、どうなるの？ 今の姫野実衣奈とどっちになるの？

(どうなるって……どっちも私だから何も変わらないと思うけどなあ。乙綺くんの目の前にいる今の透明な私は消えるけどね)

記憶は？ ミーナの今の記憶はどうなるのさ。
(たぶん引き継がれるんじゃないかなあ。確実なことは分からないけど、なんとなくそう思う)

それって実体の持つてる記憶も残るってことだよな？ なら、さっきのギャルゲーをプレイした記憶も実体にあるわけだから、ミーナが悔しがる必要ないんじゃないか？

(そうかもしれないけど、記憶の継承に関しては断言できないからなあ)
そうか……。

(ん？ どうしたの、そんな暗い顔しちゃって)

これは、その……卑怯な手かもしれないんだけどさ……えっと。

(なに？ 私相手にハッキリしないのは珍しいね)

その、ミーナが今の記憶を保持したまま実体に戻れば、俺も気軽に姫野実衣奈とお話できるかなあ？ なんて。

(たしかにそうだね。私相手だと乙綺くんも緊張しないだろうしね。でも、今のままの乙綺くんだと、私の実体と接触できないでしょ)

結局そこか！ 自分のコミュ力の低さを呪った。

(無理矢理に接触したとして、戻った後、私の記憶が保持できているのか不明だしね。そうなったら乙綺くん、私に不審に思われたまま高校生活を送ることになるよ)

それは恐ろしい。俺の高校生活終了じゃないか。今も大して始まってないけど。

ただ、それよりも。今のミーナの記憶が無くなるのだとしたら、そっちのほうが寂しい。
(おやおや？ もしかして、私のことを気にかけてくれているのかなあ？ ふふふ)

試すように微笑みかけてくるミーナ。姫野実衣奈だったら、俺にこんな表情を投げかけてくることはない。実体の彼女であれば、他人行儀で警戒した顔を向けてくるはずだ。

「早乙女くん!」

こんな感じで。

……いや、こんな感じで、じゃねえよ！ 姫野実衣奈と鉢合わせしちゃってんじゃないん！
(これは気まずい状況だね。間が悪いのは乙綺くんなのか私の実体なのか……)

ギャルゲーが入っている袋を後ろに隠し、ソワソワした様子の姫野実衣奈。

「こ、こんな場所で奇遇ですわね。お買い物ですか？」

奇遇もなにも、貴女を尾行していたなんて言えない。

「え、あ、そ、そうですね！ は、はいい！」

とりあえず適当な返事をして誤魔化す俺。

彼女はすぐに平常時の冷静さを取り戻したようで、神々しいオーラを発しはじめた。

（発しはじめてないから！ な、なんでなのよう！ なんて、コッチのほうが、き、きき緊張してるのよお！ はあううつ）

「私も頼まれていた品を代理で購入しにきました。初めて来る場所でしたので、すこし緊張してしまいました」

頼まれていた、代理、初めて、という単語を強調して伝えてくる彼女。

（ぐぬぬう……なんという見え透いた嘘を。乙綺くん、こ、これは逆にチャンスよ、状況はこちらに有利だよ！）

「ば、ばくも、は、はは初めて……でです」

（一人称変わってるのいい！ 乙綺くんも相手の嘘に乗っちゃってるのいい！）

「そうでしたか。もう遅い時間なので帰りは気をつけてくださいね。それでは良い週末をお過ごしください」

一礼して、姫野実衣奈は駅の改札口を通り抜けていった。

（逃げられたあああ！）

たぶん、買ったギャルゲーを早くプレイしたかったんだよ……あはは。

——帰宅後。放心状態のまま俺は椅子にもたれかかる。

（さっきのは絶好のチャンスだったのになあ）

ミーナは定位置となった俺のベッドに、ぺたんと座っている。

どこにチャンスがあったのだろう……。

（攻略相手のホームだったんだよ？ 攻めれば落とせたとと思うんだけどなあ。最低でもフラグは立てられたのに）

いやいやいや、姫野実衣奈からしたら、見られたくない姿を見られた感覚じゃね？

（そうなんだけど。私、趣味を共有できる友達に欲しかったからさ。乙綺くんがギャルゲーに興味を持つてて分かったら、絶対に食いついてきたはずなんだよ）

マジかよ。その情報を先に知ってれば、なんとか会話を弾ませることができたかも………しれなくもないような気もするよな。いや、たぶん無理だな。

（私の本性を知っても、まだ私を持ち上げて自分を卑下しているんだね）

ギャルゲー好きってことは分かったけど、姫野実衣奈はあくまでも姫野実衣奈だからな。どんな本性を知っても俺の永遠のヒロインだ。

（しれっと恥ずかしいセリフ、い、言わないでよ……なんで私相手だと、キュンッとするセリフ

をサラリと吐けるの……)

ミーナは口元をすぼめて、顔を俯かせてしまった。

それで、ヒロインの新たな情報が分かったのはいいけど、作戦とやらはどうすんだ？
(えっと、そ、そうだね、もちろん続行するよ。有益な情報も掴んだしね)

そんな情報、入手してましたっけ……？

(乙綺くん、気づかなかった？ さっきの私の実体、乙綺くんのことを早乙女くんと呼んだんだよ。何度か交流するうちに、距離は縮んでいくってことだよ)

なるほど！ 同じ人に何度も会うと、知らずに親近感湧くっていうしな。

(今後もしも地道に乙綺くんの存在をアピールしていくの。よし！ これまでは偶然だったけど、月曜日はこっちからアプローチをかけるよし！)

瞳を輝かせて、握り拳をつくっているミーナさん。やる気満々である。

あれ？ 実際にやるのは俺だね!? 想像しただけで緊張してきたあ！

翌週、月曜日の朝。

(おはよう！)

俺の頭上で鳴り響くヒロインアラーム。本物のアラームよりも一時間早く鳴るので、俺

の目覚めはいつもより悪い。

おはよう。

(朝からテンション低いな、元気にいこうよ！)

プカプカと宙を漂っている彼女は、なんだか楽しそうだ。

でも、そんなこと言っていられない。早く元に戻さないと、ヤバイことになるんだから
(そうそう、だから乙綺くんも早く脳を活性化させてね。今日は乙綺くんに私の実体と交流してもらうんだから。頑張ろうね！)

そーいやそーいだった。急に胃が痛くなってきたぞ。不慮の事故でもない限り、まともに話せそうにないが……。でも、俺にはミーナが付いている、いや憑いている！

(任せて！ 今日フラグを立てておけば、後々イベントに発展する可能性が高いはず)
ギャルゲー用語を自然と使うミーナに気後れしてしまうが、俺はやるしかない。

(さあ、今日は張り切っていくよ！)

こうして俺とミーナの六日目ガスタートした。

学校の教室に行き、自分の机に到着するとミーナから作戦内容を聞かされる。
俺の席は窓際で、ミーナは窓の縁に腰掛けている。

（作戦なんて大げさなものじゃないよ。昼休み、私が友達と食事する前に、乙綺くんが声をかけるの。今日は俺と一緒に食べない？　って）

無理い！　無理無理無理無理！

なに言ってるの！？　この思念体やっぱ信じちゃダメかもしれない！

（絶対大丈夫だよ。私はいつもクラスの女子友達と中庭で食べてるから、教室を出る前に誘っちゃえば問題ないよ）

なんで、さも当然のように話を進めているのだろうか。俺に拒否権はないのだろうか。

ちなみに、中庭でご飯を食べる生徒はウチのスクールカーストのトップ集団である。俺みたいな底辺のゴミ野郎は中庭に近づくことすら許されていない。

（また卑屈な発言してるね？　誰がどこで食事しようとする自由でしょ。なんなら乙綺くんも、翔真くんを誘って中庭に来ればいいんじゃない？　そうだね、それがいいよ）

なーにが、それがいい、だ。簡単に言ってくれるな。

「乙綺おーっす」

会話にでてきた翔真が挨拶してきた。

「うっす」

（男子ってほんと愛想ないよね。もっと明るく笑顔で挨拶すればいいのに）

そんな男子高校生にはなりたくない。多感なこの年代で、周りから浮くようなことを進んでやる愚か者にはなりたくない。一度クラスで浮くと、元の高さまで沈むのは相当厳しいのだ。俺の場合はクラス平均よりも沈みすぎてしまっているが。

（どうして、そんなに卑屈なのかなあ……）

俺が卑屈になって下になることで、俺の代わりにだれか一人、上にいく。俺はそういうことに幸せを感じるんだ。

（それ全然かっこ良くないからね）

へいへい、さーせん。

（なるほど、これは一考の余地ありだね。プランを練り直す必要がでてきたかもしれない）

プラン？　やめて、怖いことしないで。いきなり食事に誘えとか言うから、拒否反応のあまり調子に乗ってしまいましたすみませんごめんなさいもう言いません。

（とりあえず、昼休みまでは平常どおりに過ごそう）

「乙綺さつきからどうしたん？　窓のほうを眺めて、ぼーっとして」

「へ？　ああ、お、おう、悪い悪い、ちょっと考えごととしてな」

翔真を適当に受け流し、午前の授業に入る。真面目に授業に取り組むクラスメイトたち

をよそに、俺は脳内でお昼休みの予行演習をしていた。

昼休み突入のチャイムが鳴る間際の数秒。

必死に自分のノートに黒板の文字を書き写している遅筆の学生。

購買の人気弁当を確保するため、イチ早く教室を飛び出す体勢になっている男子生徒。彼らの様子とは対照的に、俺はギリギリまで脳内で静かに作戦会議をおこなった。

そして、運命の鐘が教室内に響き、学生たちはいつもと変わらない昼休みに突入する。（よし！ 六組にいる私のところに向かうよっ！）

俺だけは、どうやらいつもの日常を過ごすわけにはいかないようだ。

本当に行くのか……緊張のせいか徐々に心拍数が上昇してきたような……。

「おーい、乙綺どこ行くん？ これから昼飯だろ？」

いつもは教室の片隅で、一緒にコンビニのパンを食べる翔真に声をかけられる。

姫野実衣奈は手作り弁当を持参だ。情報によると、母親と作ったりしているそう。

（な、なんで知ってるの!? 相変わらず凄い情報網だね……逆に感心してきたよ）

「ああ、その、ちょっと用事あってよ。悪い！ 今日是一人で食っててくれ！」

「マジかよー！ 教室で一人飯とか寂し過ぎんぜえー！」

翔真のことは全然気にしていない。なぜなら、翔真は俺と違って友人がいっぱいいるか

らだ。俺とつるんではいるが、ほかのクラスメイトたちにも顔が広い。実際、ぼっち飯になることはないだろう。むしろ、今日俺が翔真と食べなかつたことで、ほかの友人たちと昼食をとるようになり、結果俺だけがぼっち飯になる、という可能性のほうが高そう。だ。（凄いマイナス方向への思考だね……翔真くんの友人たちと一緒にご飯を食べるといふ発想はないのかな……）

知らない人間といきなり仲良くするとか、勇者の試練かよ。勇気を試される試練とか、俺なら絶対にやらん。一生、村で牛たちと戯れていた。動物は良い、俺を裏切らない。

（なんで、いきなり牛の話をしているのかな……）

……あれ、ちょっと待てよ。俺、これから姫野実衣奈を昼飯に誘うんだよな？

（うん、そうだよ。だから今、六組に向かつてるんじゃない）

勇者の試練どころか、いきなりラスボスの魔王に突撃しようとしてんじゃない、俺！

（ちょっとお！ 魔王って誰のこと!?）

やだやだやだやだあ殺されるよ！ スライム倒すところからにしてくれ！ 全然レベル上がってねえんだよ！

（そんなこと言っていないで。ほら、私の教室に着いたよ）

魔王の居城に辿り着いてしまった……ひのきのほうとおなべのふたで、どうやって倒せ

というのだろうか。こんな縛りプレイ望んでないんだけど……。

（早くしないと友達と中庭へ行っちゃう！）

くそ、こうなりやヤケクソだ！

俺には裏ボスという強い仲間が憑いている、信じるしかねえ！

勢い良く魔王城へと足を踏み入れる。

さすがは魔王の根城。そこに住まう魔物たちも、俺の村周辺の者たちと雰囲気が違う。

（こらあ！ 人聞きの悪いこと言うなあ！ みんな良い人たちばかりだよ！）

裏ボスの言葉を無視して、魔王が佇む窓際最後尾席へと進撃する。

（さあ！ この勢いで、魔王——じゃなかった、私に話しかけよう！）

姫野実衣奈の席まで行くと、さすがに周りの魔物も俺に注目してくる。そりやそうだろう、冴えないモブ男子が学校のアイドルの前に現れたのだから。俺が傍観者の立場だったら、今の俺を激しく罵っているだろう。姫野実衣奈に悪い虫がつくのは許さない。しかし、（ね、ねえ！ 大丈夫!? 乙綺くんの心拍数、凄く上昇してるよ！ 緊張感が尋常じゃなくくらい高まっているんだけど！）

——今の俺は悪い虫のほうだ。

教室内の不穏な空気が俺の心拍数をさらに上昇させる。

高ランクの魔物たちの視線攻撃に、俺のHPは徐々に削られていく。

HPが尽きかけたとき、目の前の魔王が俺の存在に気づいたようだ。

そして、HPとは逆に、俺の心拍数はカンスト値まで上昇した。

（あわ、あわわわあ、ど、どうしよう。ドキドキが止まらないよ……）

裏ボス！ しつかりしてくれ！ おおおお俺は、なんて声をかければいいんだ!?

（えつと、えつと、あわわわあ……）

裏ボスが混乱していると、目の前の美少女の唇が動いた。

「あつ！ さ、早乙女くん!？」

「えつ！ いやつ、その、あのつ、えつと！ つまりは、その」

（ちよつとお！ 緊張し過ぎだよ！ 心臓破裂しそう……）

「な、なんのご用件でしょう……か？」

姫野実衣奈は困惑している様子で俺に問いかける。それを、周りの取り巻きたちがさなる怪訝な様子で俺を見つめてくる。死にたい。

「そ、しょの、じじゅつ！ じつは、きよ、きよきよきよ」

噛み過ぎて俺もなに言ってるのか分からない。死にたい。

（が、がが頑張って！ 相手は私！ なにも緊張することないよ！）

「……………」

（こら私！ 無言で見るなあ！ 察しなさいよ！）

ミーナは、キョトンと無言で椅子に座っている姫野実衣奈を見据えながら、机をドンドン叩いている。ドンドンという音こそしないが、彼女のもどかしい気持ちたちが伝わってくる。

「きよきよきよ今日は、しよく……しよくじゅつ！ しよくdゅふつ！」

「ヒメー、早く中庭行こー？ 昼休みの時間、短くなっちゃうよー」

姫野実衣奈の取り巻きが、俺を無視して彼女を昼食に誘ってきた。

（ああ！ キイちゃん、今、大事なところだから私を誘わないでよ！）

「ほら、そんなところでばーつとしてないで、行くよ？」

キイちゃんと呼ばれた女子生徒は姫野実衣奈を急かすように言う。

「あ、でも……」

姫野実衣奈は俺に対し複雑な表情を向け、なにか悩んでいるようだ。

（なに悩んでいるの、私！ 目の前の大事な客人を放置しちゃダメでしょ！）

ミーナは実体の自分に対して毒づいている。焦れたい気持ちからか、姫野実衣奈の顔をピンタするようにペチペチ叩き始めた。

もちろんミーナのそんな攻撃が姫野実衣奈に通じることなく――

「ど、ごめんなさい。私は、これから友達と昼食に行きますので……なにかご用であれば、後ほど伺います」

HPが尽きた俺は、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

（ああ！ 行かないで私、私を置いて行かないで！）

俺の元から離れられないミーナは、実体に虚しく手を伸ばすことしかできなかった。

自分の教室に戻った後、俺に自我が蘇る。

ぐふっぐふう、うつふつふう！

（ど、どうしたのかな？ 壊れちゃったの!!）

大成功だあ！ 姫野実衣奈と話せたぞ！

（ぜっんぜん、大成功じゃないよ！ 大失敗だよ！）

今の自分の持つてくるコミュ力を如何なく発揮できた。これまでとは違い、今日は俺から話しかけたからな。その点を考慮すると、パーフェクトな出来だったと思うぞ。

（それ……気のせいだよ……。それで、どが大成功だったのかな？）

朝方と同じく、窓辺に寄りかかりつつ俺を詰問してくるミーナ。

朝と違う点は腕組みをしているのと、目つきが鋭くなっている点か……。

どこって、姫野実衣奈と後ほど話せる約束を取り付けられたじゃねーか。

(あれ、たぶん社交辞令だよ)

またまた〇冗談を。俺と、また今度話をしてもいいっていうことでしょ？

(話をしても全然構わないけど、乙綺くんへの好感度が上がったわけじゃないと思うよ) ふひい!? ライバルに先んじて俺が特別扱いされたわけじゃないの？

(ライバルなんていないよ。そもそも私には特別親しくしている男友達がいらないもんつ) 知ってる。そんな野郎がいたら、俺が叩き潰してる——心の中で。

(乙綺くんって独占欲強いんだね……。舞い上がっているところ悪いんだけど、さっきのコミュニケーション方法では全然ダメだよ)

それは、はい……。自覚しております。でも、ミーナにも責任があるんだからな！ ミーナがアドバイスしてくれるって言うから、俺も挑戦したのにさっ。ぐすん。

(泣かないの。それに関しては私も悪かったよ……。心拍数が上がりだして、まともに頭が働かなかったんだもん)

非モテのコミュ障男子の気持ちが分かったか。

(自分相手に体験することになるなんてね。自分相手に緊張するのは何度経験しても慣れないよ……)

結局、ぼっち飯になっちゃったじゃねーか。

俺の席は窓際なので中庭の様子がよく見える。

あはは、姫野実衣奈たちの明るい声が聴こえてくるようだけ。俺はぼっちだけだな。

(この歯痒い気持ちはなんなのかなあ、まったく。まあ乙綺くんは、ぼっちではないでしよ？ 私がいるんだし)

周りからみたら完全にはっちなんですけど。

温めるとより美味しい、と書かれたパンを冷たいまま口に放り込む。

寂しくぼっち飯を食べはじめると——

「乙綺、ヒメを昼食に誘ったってホント？」

(あ、凜音ちゃんだあ！ 今日ほボニーテールにしてるよお！ 可愛い！)

凜音がボニーテールを揺らしながら駆け寄ってきやがった。耳ざとい。

ご飯を食べるとき、凜音は髪を結んでいるらしい。全然興味ないから、今まで気づかなかったわ。つか、昼休みに俺に声かけてくんの珍しいな。翔真がいなかったか？

「情報流れんの早すぎだろ……。今さっきの出来事だぞ……」

(まさか、こんな突発イベントが発生するなんてえ！ どうしようしよう)

ミーナさん、さっきまでの負のオーラが完全に消し飛んでるじゃん。

顔に花が咲いてんぞ。どこに咲かせる要素があんだよ。

「中川くん、さっきほかのクラスの男子とご飯食べに行っちゃったよ?」

「ああ、知ってる」

「それで、乙綺はヒメに断られて、寂しく一人で昼食タイムかー」

「なんだよ、べつにいいだろ。放っとけ」

（その選択肢は最悪だつてば!　ここは、凜音ちゃんと一緒に食べる流れだよ!）
知らんがな。

「ヒメにはヒメの都合があるんだから、急に誘っても無理に決まってるじゃん」

（ほらあ!　なんか私の好感度まで下がってない?　私なら恩人である乙綺くんの誘いを断るわけないもんつ）

いや、断られたわけですが。

（むうう）

なにやら膨れてしまった様子のミナさん。

「べつに凜音に迷惑かけてないだし……関係ないだろ」

「でも、一人で食べるの寂しいでしょ。クラスで目立つちゃうし。だ、だからさ、今日はアタシと一緒にお昼——」

「乙綺にいい、お昼ご飯一緒に食べよう」

凜音が言い終わる前に、教室の扉を勢い良く開け放ち、陽茉莉が突入してきた。

突然の陽茉莉の乱入に、俺のクラスメイトたちも目をキョトンとさせている。

そりやそうだ、陽茉莉は高等部ではなく中等部所属のお子ちゃまなのだから。

「ちょっと陽茉莉!　あんたは中学生なんだから、こっちの校舎に来ちゃダメでしょ!」

「わたしと乙綺にいいの間に、そんな壁なんかないもん」

「中等部と高等部という壁があるでしょ。なにをいきなり壁破壊しちゃってんのよ。巢に戻りなさい」

「なんか凜音ねえの機嫌が悪い気がするよう……。いつものお邪魔虫がいなかったから、乙綺にいと過ごせるチャンスだったのになあ」

（いいなあ乙綺くん、モテモテで）

ああ、もう。俺は静かに飯を食いたいだけなんだつてば。

（ところで、お邪魔虫って翔真くんのこと?）

ああ。翔真は陽茉莉のことを気に入ってるらしいんだわ。陽茉莉からしたら厄介な相手ってことみたいだな。翔真は見境なく女の子のことをチェックしているようだから。

「あ!　陽茉莉ちゃん!　なににな?　オレに会いに来てくれたの?」

ほら、翔真が教室に戻ってきたぞ。

「うう、お邪魔虫のばかあ！ 逃げろお！」

陽茉莉は翔真の声を聞くなり教室から脱兎のごとく立ち去った。嵐のようなやつである。……ああ、もう、ホント静かな昼休みを返してくれ。

これも全部ミーナのせいだ。

（まーた私のせいにしてるう）

結局、多少の空腹が紛れただけで、なんの成果もないまま昼休みは終了を迎えた。

午後の授業中、昼休みの反省と今後の行動方針をミーナと共有することに。

（今日の私の実体とのやり取りで分かったよ。いきなり昼食に誘うのは難易度が高かったみたいだね）

俺のメンタルを削り取って、やつと理解してくれたか。

（うん、改めて実感できたよ）

男相手なら知らない相手でもそこそこなんとかなるんだが。ほんとだぞ？ 少しドモるくらいだ。相手が女子——姫野実衣奈だと俺の細胞が悲鳴をあげるんだ。

（それ、むしろ私のことが好きっていうより、苦手っていうレベルなんじゃ……）

そんなことはない！ いつも妄想してたくらい懂れている！

（そんなに堂々と言われると、は、恥ずかしいな……むしろ、その感じを実体の私の前で出せたらいいんだけど）

それは無理だ！

（分かった、これは順番を間違えたかもしれない。私としたことが、主人公のステータスを上げることを疎かにしていたよ）

主人公？ まーた、ギャルゲーの話してる？

（フラグを立てるためには、まずパラメーターを伸ばさないとだね）

これ、勝手に話を進めてるやつだ……。

（よし、ヒロイン攻略作戦を第二段階へと移行させるよ！）

こうして、俺は第一段階を知らないまま、何かの第二段階へと突入した……らしい。

続きは、4月17日発売のファンタジア文庫で！

©Yujin Orikasa, Sabamizore 2020